

仙台市文化財調査報告書第59集

下ノ内浦遺跡

昭和58年3月

仙台市教育委員会

C-C' 旧カマド、旧煙道横断面

層No.	上 色	上 質	そ の 他
1	7.5Y R 4/ 黒褐色	黒 艶 土	
2	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト 硫化物を少量含む	
3	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト 黄色焼土ブロックを含む	
4	10Y R 5/ 黑褐色	シルト質粘土上	
5	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト 黄色焼土ブロックを多量に含む	
6	10Y R 5/ 黑褐色	シルト質粘土上	
A	無 色	無 色	

H-H' 旧煙道横断面

層No.	上 色	上 質	そ の 他
1	7.5RL 7/ 黑褐色	粘土質シルト 黑褐色燒土を含む	
2	2.5Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト 硫化物を含む	
3	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト 黄褐色粘土を含む	
4	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト 黄褐色粘土、燒土を含む	

F-F' ピットI断面

層No.	上 色	上 質	そ の 他
1	7.5Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト 烧土・硫化物を多量に含む	

G-G' 新煙道横断面

層No.	上 色	上 質	そ の 他
1	10Y R 5/ 黑褐色	シルト	硫化鉄・灰岩粘土・炭を含む
2	2.5Y R 5/ 黑褐色	シルト質粘土	硫化鉄・粘土を多く含む
3	10Y R 5/ 黑褐色	シルト	硫化鉄を含む
4	10Y R 5/ 黑褐色	シルト質粘土上	硫化鉄を含む 基本層
5	10Y R 5/ 黑褐色	シルト質粘土	硫化鉄を含む

E-E' SI-I内 SK-I断面

層No.	上 色	上 質	そ の 他
A-1	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を含む
A-2	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物・焼土のブロックを含む
B-1	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む
B-2	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト	焼土を含む
B-3	10Y R 5/ 黑褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物・泥を多量に含む

D-D' SI-I内 SK-I断面

層No.	上 色	上 質	そ の 他
1	10Y R 5/ 黑褐色	シルト質粘土上	焼土・炭化物を少量含む
2	10Y R 5/ 黑褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物を少量含む、褐色土

仙台市文化財調査報告書第59集

下ノ内浦遺跡

昭和 58 年 3 月

仙台市教育委員会

序

下ノ内浦遺跡のある富沢地区は、近年、土地区画整理事業や、高速鉄道建設事業等々に伴い、大きく変貌しつつあります。

西多賀を含む荒川流域には、仙台市域の中でも最も濃密な遺跡群の分布をみる地域となっています。近隣の山口・六反田・泉崎・中谷地・鍋田等の各遺跡の調査では、数多くの貴重な文化遺産の発見をみております。

本報告書は、富沢区画整理地区の一画にある下ノ内浦遺跡に開発行為が計画されたため、文化財保護保存の協議を重ねた結果、記録保存の措置を講ずる旨をもって、事前の調査を実施するに至り、その成果をまとめ、公表するものであります。

本書が文化財保護・保存・啓発に大きく寄与することができますならば、望外のよろこびであります。市民のみなさんはもとより、学兄諸氏の研究・活用を期待するとともに、本遺跡の調査や報告書作成に当り、多くの方々の御協力・御助言をいただきましたことに対し、心から感謝を申し上げ、序といたします。

昭和 58 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例 言

1. 本書は、みやぎ生活協同組合泉崎倉庫第1期建設工事及び、灯油スタンド建設工事に先行する下ノ内浦遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1:25,000仙台東南部地形図を使用した。
3. 土層と遺物の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人、日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖を使用した。
4. 本文の執筆は調査担当者のうち佐藤 隆、柳沢みどり、工藤哲司が行ない、編集も3名で行なった。執筆の分担は下記の通りである。

佐藤 隆 I・II・III・IV-1・V・VI-3

柳沢みどり IV-2・VI-1-(1)~(2)

工藤 哲司 VI・VI-1-(3)~(9)・VI-2

5. 本調査においては、次の通りの遺構略号を使用した。

S B : 捕立柱建物跡

S D : 溝跡

S I : 穴穴住居跡

S K : 土壌

S X : その他の遺構

6. 本報告中の実測図の方位、実測基準線は真北を基準としている。

7. 遺物は下記の通り分類し、登録してある。

A	縄文土器	J	陶磁器
B	弥生土器	K	石製品・石器
C	土師器（非ロクロ）	L	木製品
D	土師器（ロクロ）	N	鉄製品
E	須恵器	P	土製品
I	自然遺物		

8. 遺物実測図中、須恵器については断面を黒く塗潰して示した。

9. 遺物実測図の中心線が一点鎖線のものは、復原径によって実測を行なったものである。

10. 本報告書に関係する出土遺物、作成図面、写真は一括して仙台市教育委員会が保管している。

本文目次

序文	
例言	
I. はじめに	1
II. 調査に至る経過	2
III. 遺跡の位置と環境	3
IV. 調査の方法と基本層位	4
V. I区の調査	6
1. 発見遺構	6
(1) 土 壤	6
(2) 1号河川跡	10
(3) ピット	10
(4) 遺構外の出土遺物	10
VII. II区の調査	14
1. 発見遺構	14
(1) 穴住居跡	14
(2) 掘立柱建物跡	23
(3) 土 壤	26
(4) 溝 跡	28
(5) 性格不明遺構	31
2. 遺構以外のII区出土土器	34
(1) 表土出土土器	34
(2) II層出土土器	34
(3) V層出土土器	34
(4) V～VI層出土土器	37
(5) VII層出土土器	37
(6) VIII層出土土器	38
3. その他のII区出土遺物	39
(1) 土 锤	39
(2) 小形手捏ね土器	39
(3) 刀 子	40
(4) 陶 砥	40
VIII. まとめ	40
1. 出土遺物の総括	40
2. 発見遺構の年代と総括	49
3. 調査成果のまとめ	51

下ノ内浦遺跡発掘調査報告

I. はじめに

1. 調査要項

- 遺跡名 下ノ内浦遺跡
- 遺跡の所在地 仙台市富沢字下ノ内浦12他5筆
- 遺跡の現状 宅地及び更地
- 調査目的 倉庫建設工事及び灯油スタンド建設工事に伴う事前調査
- 調査対象面積 540m²
- 調査面積 270m²
- 調査期間 (現地) 昭和57年7月16日～9月7日
(整理) 昭和57年10月1日～昭和58年3月26日

2. 調査体制

- 調査主体 仙台市教育委員会
- 調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
教諭・佐藤 隆、主事・柳沢みどり、金森安孝、工藤哲司
- 調査協力 みやぎ生活協同組合
- 調査参加者 松林四郎、齊 すき、本郷孝治、増子きねよ、小嶋登喜子、伊藤 毅、高橋敬一、佐々木博之、根深亀八郎、朝山喜八郎、佐藤忠勝、佐藤智雄、武藤秀哉、織内 登、梶川恒雄、及川由美、佐藤花子、佐藤美賀子、葛原礼子、阿部敏之、中山 潤
- 整理参加者 横山広美、赤間郁子、神尾恵美子、神尾紀以子、相沢尚子、菊地雅之、渡辺紀雄、高橋薰子、三浦和子、氏家弘子、池田真弓、菊池 豊、小島真弓

II. 調査に至る経過 III. 遺跡の位置と環境



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 下ノ内浦遺跡	11 富沢駆跡	21 六反田遺跡	31 上野遺跡	41 紫波山遺跡
2 三神塚遺跡	12 磐治原敷A遺跡	22 元岱Ⅱ遺跡	32 北目城跡	42 北前進跡
3 富沢金山塚跡	13 磐治原敷B遺跡	23 大野田遺跡	33 矢来遺跡	43 山田上ノ台遺跡
4 原遺跡	14 六木松遺跡	24 元岱Ⅲ遺跡	34 郡山遺跡	44 南ノ東進跡
5 萩町東遺跡	15 愛宕下切通上古墳	25 新田遺跡	35 矢来遺跡	45 富田南西遺跡
6 萩町古墳	16 山口遺跡	26 長町六丁目遺跡	36 龍ノ瀬遺跡	46 清太原西遺跡
7 原東遺跡	17 畠崎浦遺跡	27 北星敷遺跡	37 欠ノ上Ⅰ遺跡	47 清太原東遺跡
8 富沢清水遺跡	18 下ノ内前進跡	28 長町清水遺跡	38 欠ノ上Ⅱ遺跡	48 稲渡前進跡
9 富沢上ノ台遺跡	19 伊古田遺跡	29 上古川古墳	39 欠ノ上Ⅲ遺跡	49 竹の内進跡
10 堀ノ内遺跡	20 袋東遺跡	30 西台遺跡	40 大塚山古墳	50 河田遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II. 調査に至る経過

昭和57年6月、みやぎ生活協同組合より、仙台市富沢字下ノ内浦地内に、倉庫を建設する旨の発掘届が提出された。この個所は、周知の遺跡ではないが、昭和51~53年の六反田遺跡の発掘調査地点より北150mに位置し、この調査の結果より推測すると旧笊川に隣接する自然堤防が、今回の調査区に出現することが考えられる。また、昭和57年度の六反田遺跡、下ノ内遺跡、山口遺跡の発掘調査の結果より、本調査区まで、遺構等が拡がっていると考えられる。そこで、みやぎ生活協同組合と協議し、記録保存のための発掘調査を、昭和57年7月より仙台市教育委員会が行なった。

この富沢地区においては、昭和48年10月に、仙台市長町富沢土地地区画整理組合が設立され、約147万m²の土地が造成された。大部分が水田と畑であったので、盛土がなされている。本調

査区は、大部分が水田として耕作され、時折、旧荒川が氾濫しその影響をうけていた。調査区は、灯油スタンド建設予定地に12m×11mの不整形の第Ⅰ調査区（Ⅰ区）と倉庫建設予定地に30m×7.5mの長方形の第Ⅱ調査区（Ⅱ区）を設定し、約0.7~1.0mの盛土と旧耕作土を重機により排土した。地表下1mで遺物等の散布する層を検出した。第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区では、自然堆積の状況が異なり、遺構の残存は、第Ⅱ調査区の方が良い状況であった。



第2図 遺跡の範囲とトレンチ配置図

III. 遺跡の位置と環境

下ノ内浦遺跡は、東北本線長町駅より南西1.5kmの仙台市富沢字下ノ内浦12地内にあり、今回の発掘調査で発見されたものである。この富沢地区と南隣の大野田地区は、沖積平野である「宮城野海岸平野」に含まれ、微地形では「郡山低地」に属している。郡山低地は、名取川によって形成された自然堤防、後背湿地等から成り立っている。名取川の支流である旧荒川が、当調査区の南隣にある。この旧荒川の影響を大きく受けているのが、下ノ内浦遺跡である。

この地域には数多くの遺跡があり、昭和51年以降、発掘調査が急速に進み、仙台市内の沖積地において、縄文時代の住居跡が初めて発見された。当調査区の南150mにある六反田遺跡(註)

IV. 調査の方法と基本層位 1. 調査の方法 2. 基本層位

1) は、昭和51~53年度に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期中葉（大木8b式期）、後期初頭、奈良時代、平安時代の堅穴住居跡、古墳の周溝が確認されている。昭和56年度からの高速鉄道関係及び市民体育館建設工事関係の発掘調査では、この富沢地区に平安時代前後の水田跡が確認されている（註2・3）。同じく高速鉄道関係の発掘調査により発見された下ノ内遺跡では、表土より2.1m下で縄文時代中期末葉（大木10式期）の堅穴住居跡が確認され、その床面より複式炉と埋設土器が検出されている（註4）。古墳時代の堅穴住居跡 軒、平安時代の堅穴住居跡 軒も確認されている。六反田遺跡と下ノ内遺跡は、名取川と笊川が形成した自然堤防上であるということは、前述の発掘調査から明らかであり、縄文時代中期より平安時代以降までの複合遺跡である。このことは、昭和53~56年に行なわれた、西隣にある山口遺跡でも同様なことがいえる。大野田地区では、古墳が6基確認されている。埴輪を伴うものが5基ある。これらの古墳は、確認されているものだけであり、江戸時代の新田開発等により墳丘が削平されていて、確認されていないものもあると考えられる。

周辺に分布する遺跡には、前期旧石器の文化層が確認された山田上ノ台遺跡（註5）と北前遺跡（註6）があり、縄文時代早期~中期の遺構と遺物が発見された北前遺跡や三神峯遺跡（註7）。縄文時代中後期の遺構と遺物が発見された六反田遺跡がある。弥生時代の遺物は、山口遺跡（註8）や六反田遺跡で出土している。古墳時代の遺跡は数多く、裏町古墳（註9）は、5世紀末から6世紀初めに造られたもので、主軸40m以上の前方後円墳で、堅穴式石室より珠文鏡等が出土し、葺石や埴輪も確認されている。裏町古墳や大野田1、2号墳（註10）に埴輪を供給したと考えられる富沢窯跡（註11）もある。平安時代の遺跡としては、前述の山口遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡があり、それ以外にも数多く存在するものと考えられる。中世には、新笊川の南にある富沢館跡や大年寺山にある茂ヶ崎城がある。

IV. 調査の方法と基本層位

1. 調査の方法

今回の調査対象となった個所は、同一敷地内に、南に灯油スタンド、北に倉庫が建設されることとなつたので、第1調査区、第2調査区とし、7月16日より発掘調査を行なつた。重機で盛土部分と旧耕作土を排土し、地表下1.0~1.2mで遺構面を検出した。

I区においては、遺構が少ないので平板測量を行なつた。調査区の南西コーナーの境界杭を

基準とし、ベンチマークNo.1を12.00mとした。II区においては、真北の線上にある境界杭を基準とし、3m方眼のグリッドを調査区内に設け、北から南にA・B・C区、西から東へ1・2・3・4区とし、ベンチマークNo.2は12.20mとした。IX層上面まで精査を行ない、縄文土器片が若干出土しているので確認のため、E6～E8、E14～E16の2ヶ所にテストピットを設けた。IX層上面より1.6m掘り下げ、XIII層まで検出したが、遺物包含層は確認できなかった。

C1、C2のグリッド内ではV層上面でS1-1を検出し、全形を得るためにD、Fの1・2までグリッドを拡張した。拡張区については、調査期間の関係によってV層上面までを調査し、それ以下の層については、調査をすることができなかつた。

2. 基本層位

I区の基本層位は、13枚確認された。I～III層は、盛土・表土・旧表土で、IV層以下の土性は以下のとおりである。IVa・IVb層は細砂、Va・Vb・VI層はシルト、VII層は灰白火山灰、VIII・IX・X層はシルト、XI層は粗砂、XII層は砂質シルト、XIII層は粗砂である。

遺物は、Va・Vb・VI・VII・VIII・IX層に含まれるが、出土遺物の7割が、Va・Vb層中、及び、Vb層上面、VI層上面、VII層上面から出土している。Vb層は調査区の北東半分に、VII層は南北半分に分布しているが、遺構の検出状況、遺物の出土状況から、Vb・VI・VII層の各上面に生活面の存在が推定できる。Vb・VI層上面は標高10.6～10.7mで、ほぼ水平に堆積しているが、VII層上面は、調査区の南方へ向かってやや傾斜している。

VII・IX層を剥土すると、X層が調査区全域に拡がったが、X層を一部掘り下げた段階で、調査区の東側半分に、ほぼ南北方向に、幅5m以上の第1号河川を検出した。X・XI層はこの河川の埋土であるが、河川は未完掘である。VII層はこの河川がほぼ埋まりきってから降下したものと考えられる。

II区の基本層位は、17枚確認された。I～III層は、盛土・表土・旧表土で、IV層以下の土性は以下のとおりである。IV・Va～Vc層はシルト、Vla・Vlb層は粘土質シルト、VIIa層はシルト、VIIb層は砂質シルト、VIIc・VIIa層は粘土質シルト、VIIb層は粘土、IX層は砂、X層は細砂、XI～XIII層は粘土質シルト、XIV層は細砂、XV・XVI層は粘土質シルト、XVII層は粘土である。

遺物は、II～VII層に含まれるが、出土遺物の7～8割がV層とVII層に包含されている。遺物を含む各層は、標高10.4～11.2mの範囲に、ほぼ水平に堆積している。遺構はV・VI・VII層の各上面で確認されているが、基本層の各層と基本層を除く亜層、遺構内埋土層の土色・土性が非常に類似しており、遺構の確認は困難であった。未確認の遺構が他に存在していたことが充分考えられる。

V. I区の調査 1. 発見遺構

Vc層を剥土すると、Va層が調査区の全域に拡がったが、Vc層を一部端り下げた段階で、調査区の東隅に、幅3m以上の第1号河川を検出し、完掘した。

尚、XIII層以下については、深掘区A・B 2地点での部分調査である。

I区とII区の基本層位は、土色・土性がI区では褐色・黄褐色を基調とするシルト・砂質シルトなどに対し、II区は、暗褐色・灰黄褐色を基調とする粘土質シルトであり、両調査区間が約75mにもかかわらず、層の変化が著しい。層の対比が可能なのは、I区のV層とII区の第1号土壤埋土1層の灰白火山灰層のみである。

本調査で生活面が把えられたのは、両区のV層前後の層で、時代は7世紀後半から10世紀代に限定される。又、この時期以前のこの時期に近接した時期に、荒川の影響を受けた時期があったことが確認された。

V. I 区 の 調 査

1. 発見遺構

(1) 土 壤

1号土壤

長軸100cm、短軸60cm、深さ24cmを計る楕円形の土壤で、Vb層上面で検出された。断面形はU字状を呈し、堆積土は1層で、出土遺物はない。

2号土壤

長軸130cm、短軸90cm、深さ26cmを計る卵形の土壤で、Vb層上面で検出された。断面形は、V字状を呈し、壁は緩やかに立つ。堆積土は1層で炭を含む。出土遺物はない。

3号土壤

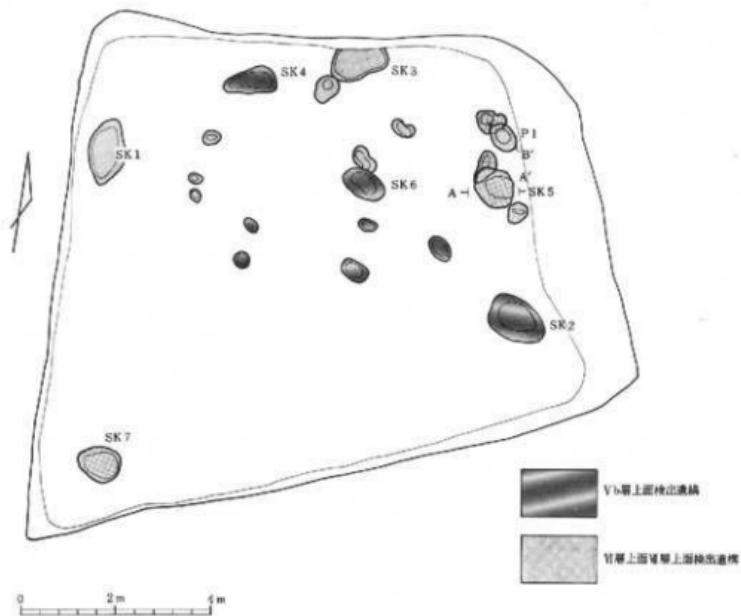
長軸120cm、短軸60cm以上、深さ10cmを計る不整形の土壤で、Vb層上面で検出された。断面形はU字状を呈し、底面はほぼ平坦で、壁面は70°位に急に立ち上がる。堆積土は1層でオリーブ黒色のシルトであり、炭を多量に含む。出土遺物は土師器が2点あり、ロクロを使用した土師器が1点含まれる。

4号土壤

長軸110cm、短軸50cm、深さ15cmを計る不整形の土壤で、VI層上面で検出された。断面形はU字状を呈し、底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は1層である。

5号土壤

長軸100cm、短軸80cm、深さ50cmを計る楕円形の土壤で、VI層上面で検出された。底面は東



第3図 I区層位別遺構配置図

第1表 SK-6 出土遺物集計表

種 別	土 師 器			遺 墓 器			総 文
	環(非ロクロ)	環(ロクロ)	甕(非ロクロ)	環			
無 頃							計
部 位	口縁部～全体	口縁部～全体	輪 扇 鋸 切 体	部	口縁部～全体		
外表面	不 現	ロクロ	手打ちヘラタスキ	ハケヌ	ナ テ	ロ ク ロ	
破片数	1		1	1	1	2	7
実数		1					1
	1	2	2	1	2	8	

第2表 SK-3
出土遺物集計表

種 別	土 師 器		計
	甕(非ロクロ)	甕(ロクロ)	
部 位	全体	全体	
外表面	ケズリ	ロクロ	
破片数	1	1	2
	1	1	2

側にピット状の落ちこみがあり、西壁は若干オーバーハングしている。堆積土は5層にわかれ、土器片を4点出土している。ロクロを使用した土師器片が1点含まれる。中世陶器（鉢）片2点を出土している。

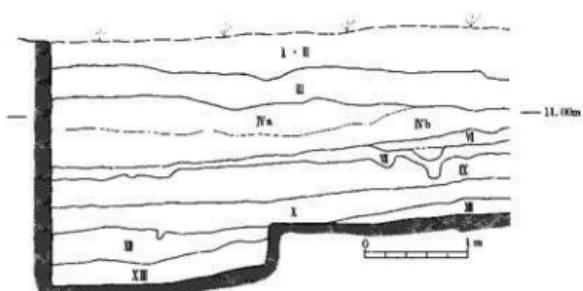
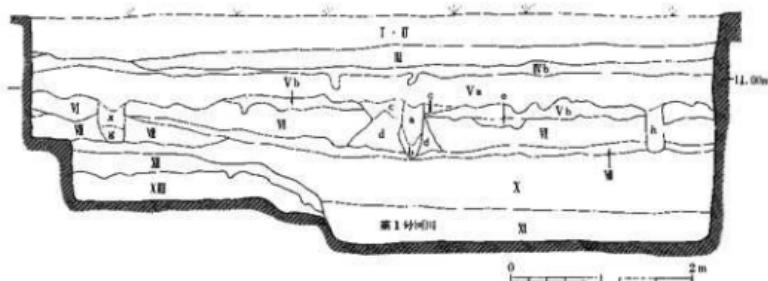
V. I区の調査 1. 発見遺構

6号土壙

長軸180cm、短軸80cm、深さ30cmを計る楕円形の土壙で、VI層上面で検出された。断面形はU字状で底面は平坦である。堆積土は2層であり、ロクロを使用した土師器2点(第9図No.1)ロクロを使用しない土師器片3点、縄文土器片2点を出土している。

7号土壙

長軸100cm、短軸70cm、深さ15cmを計る楕円形の土壙で、V層上面で検出され、断面はV字状である。堆積土は1層であり出土遺物はない。

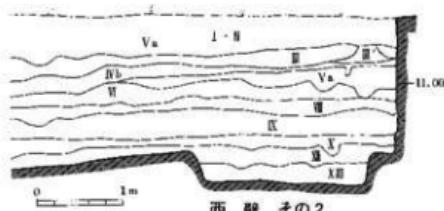


西壁 その1
第4図 I区土層断面図 その1

(1) 土 壤

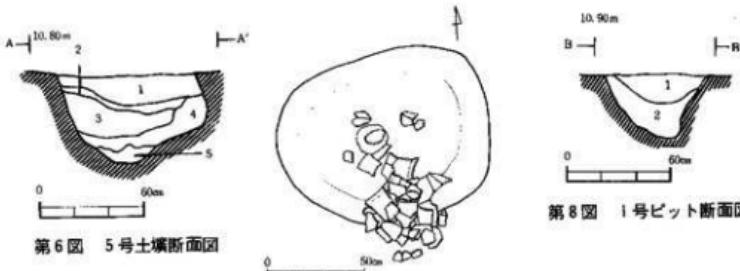
第3表 SK-5 出土遺物集計表

種 別	土 器			中性 陶器 計
	环 (ロクロ)	环 (ロクロ)	環 (非ロクロ)	
形 状	黑 皮			
部 位	口縁部-体部	口縁部-体部	体 部	
外 面 質 感	コ ナ デ	ロ ク ロ	不 明	不 明
1-2 層 細 片 數		1	1	2 4
3-4 層 細 片 數	1			1 2
	1	2	1	2 6



第5図 I区土層断面図 その2

層 番	土 色	上 質	そ の 他	層 番		土 色	上 質	そ の 他
				1	2			
1-2	盛上及び高 い			10YR 4-5 黄褐色	粘 土			
3	7.5YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物・無化物・無機物を含む	5	5.5YR 4-5 黄褐色	砂質シルト		炭化物を含む
4	7.5YR 4-5 褐色	沙	無機物・マンガン鉄を含む	6	10YR 4-5 黒褐色	細 砂		無機物を含む
5	7.5YR 4-5 褐色	細 砂	無機物を含む	a	10YR 4-5 褐色	粘 土		砂や無機物を含む
6	7.5YR 4-5 褐色	細 砂	無機物を含む	b	7.5YR 4-5 褐色	粘 土質シルト		無機物を含む
7	10YR 4-5 褐色	シルト	無機物・無機物を含む、無機物を含む	c	10YR 4-5 に近い黒褐色	シルト		マンガニ鉄・無機物を含む
8	10YR 4-5 褐色	シルト	無機物・無機物を含む、無機物を含む	d	2.5YR 4-5 に近い褐色	砂質シルト		マンガニ鉄を含む
9	2.5YR 4-5 灰褐色	沙	無機物・無機物を含む	e	2.5YR 4-5 黃褐色	砂質シルト		炭化物(柱2cm)を含む
10	10YR 4-5 褐色	シルト	無機物を含む、無機物を含む	f	10YR 4-5 に近い黒褐色	シルト		マンガニ鉄を含む
11	10YR 4-5 褐色	シルト	マンガニ鉄・無機物を含む、無機物を含む	g	2.5YR 4-5 褐色	シルト		無機物を含む
12	10YR 4-5 褐色	シルト	マンガニ鉄・無機物を含む、無機物を含む	h	10YR 4-5 黃褐色	粘 土質シルト		無機物を含む
13	10YR 4-5 に近い黃褐色	シルト	マンガニ鉄・無機物を含む、無機物を含む	i	2.5YR 4-5 褐色	シルト		無機物を含む



第6図 5号土壤断面図

第7図 7号土壤および一括土器平面図

第7号土壤埋土

層 番	土 色	上 質	そ の 他	層 番	
				2.5YR 4-5 オーリーブ褐色	シルト
1	10YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物、遺物を含む		

第1号ビット

層 番	土 色	上 質	そ の 他	層 番	
				10YR 4-5 暗褐色	シルト
1	10YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物、遺物を含む		
2	10YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物を含む		

第5号土壤

層 番	土 色	上 質	そ の 他	層 番	
				2.5YR 4-5 オーリーブ褐色	シルト
1	10YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物、遺物を含む		
2	10YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物、無機物を含む		
3	10YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物、無機物を含む		
4	10YR 4-5 暗褐色	シルト	無機物 (5mm以下)、砂を含む		
5	10YR 4-5 に近い黃褐色	粘質シルト			

V. I区の調査 1. 発見遺構

(2) 1号河川跡

調査区の中央部Ⅴ層中で検出された。方向は、N-20°-Wであり、東側の立ち上がりは調査区外にあるために河川の幅は確認できないが、上端幅は6m以上であり、深さは1.5m以上を計る。堆積土は2層以上であり、1層は本調査区全体にも検出され黄褐色、砂質シルトである。出土遺物は土師器片が4点ある(第9図No.4)。この1号河川は本調査区の南隣にある旧荒川に直交する。

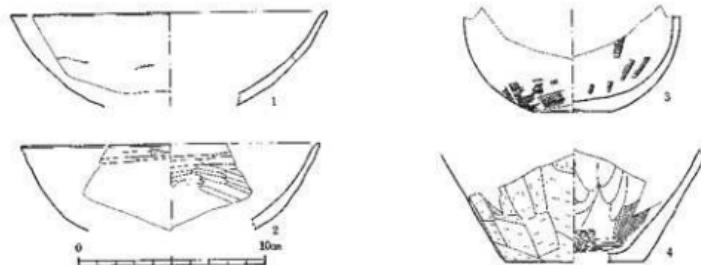
(3) ピット

ピット4 Vb層上面で検出 円形で直径40cm、深さ13cmを計る。堆積土は1層で土師器片2点を出土。ロクロを使用した土器が1点含まれる(第9図No.2)。

ピット15 VI層上面で検出 楕円形で長径45cm、深さ15cmを計る。堆積土は1層。土師器壺の一部出土(第9図No.3)。この土器は平底の底部よりゆるやかに立ち上がり、体部中央で直立ぎみになる。外面の調整はハケメのちナデ、内面の調整はヘラナデである。

ピット7 Vb層上面で検出 楕円形で長径60cm、深さ20cmを計る。堆積土は1層。土師器片7点、須恵器片1点、計8点を出土。8点ともロクロ使用の土器片である。

他にVb層上面で検出されたピットは4個。VI層上面で検出されたピットは9個ある。

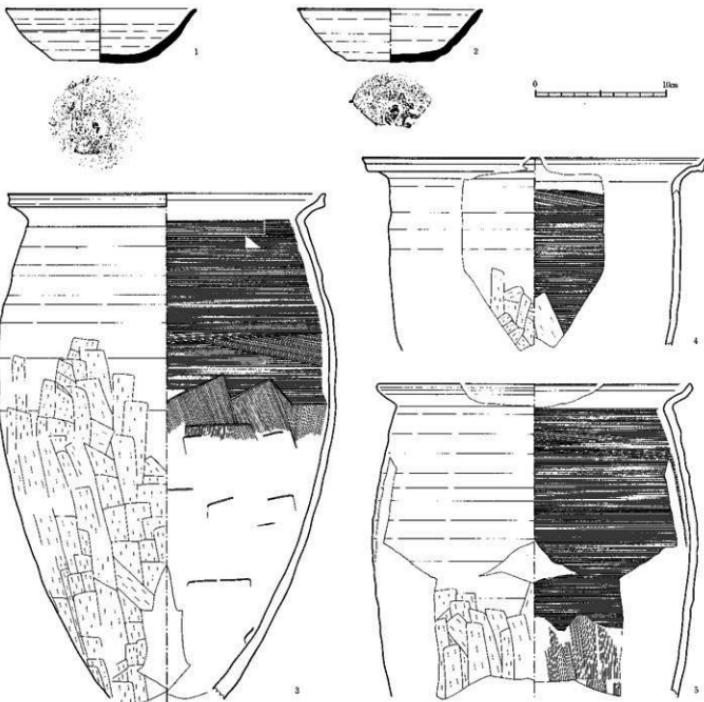


遺物No.	種別	基盤	厚さ	外観調査			内観調査			法	種	分類	地質	等高線
				口縁部	体	底	口縁部	体	底					
1	土師器	环	S.K 6-1層:不 規	不規	不規	不規	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	口絞 底絞	5.0	16.8	%	D-6
2	*	*	P.H. 4	ヘラミガキ	ロクロ	不規	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ロクロ 底絞	4.0	15.8	%	D-5
3	*	壺	P.H. 15	ハケメナデ	ケズリ	ケズリ	ハナダ	ハナダ	ハナダ	口絞 底絞	5.0	14.2	%	C-4
4	*	壺	1号河川	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ナダ	ナダ	ナダ	ロクロ 底絞	5.0	17.0	5%	C-3

第9図 I区遺構内出土土器

(4) 遺構以外の出土遺物

V層より土師器片3点出土している。①土師器壺の口縁部(第11図No.2)体部よりゆるく立ち上がり、頸部より口縁部へ外反する。内外面ともに摩滅しているがハケメが認められる。②



遺物名	種別	器形	基社	外観調査		内観調査	主な	施作分類	測定値 寸法
				口部	全体				
1 泥燒器	杯	筒形	ロクロ	口部	全体	ロクロ	口部	E-1	35-5
2 *	*	*	*	ロクロ	筒形ハラメリ	*	*	U-2	
3 土師器	甕	*	*	ロクロ	筒形ハラメリ	*	ロクロナメ	D-2	36-4
4 *	*	*	*	ロクロ	ケズリ	*	(30.0)	D-4	36-2
5 *	*	*	*	ロクロ	ケズリ	ロクロナメ	24.2	D-3	36-3
						ロクロナメ	(34.7)		
						ロクロナメ	26.0		
						ロクロナメ	24.9		
						ロクロナメ	23.7		

第10図 I区南西角埴層出土一括土器

(4) 造構外の出土遺物

遺物No.	種類	形態	場所	外面調整		内面調整		法	残存	分類	参考文
				口縁部	體部或底	口縁部	底底部				
1	土師器	變	V層	ヨコナデ、ハタメ	一部ナデ	ヨコナデ、ハタメ	ハタメ	(6.4)	10.2	上縁変形	C-2 37-6
2	+	須恵器	+	ハタメ	ハタメ	ハタメ	ハタメ	(5.0)	11.3	%	C-1
3	+	34	*	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	2.8	10.7	4.6	D-1 38-1

第11図 I区V層出土土器



1. V層出土 2. SK5 1~2層出土 3. V層出土
第12図 陶磁器

土師器型の口縁部（第11図No.1）頸部より口縁部へ外反し、口唇部で直立する。内外面の調整はともにヨコナデ、ハタメである。③土師器壺（第11図No.3）回転糸切り底部切り離し技法で、器高2.8cmと小さい、内外面ともにロクロ調整である。

IV層より須恵器2点、土師器3点出土している。①須恵器壺（第10図No.1）底部は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリで器高4.1cm、内外面ともにロクロ調整である。②須恵器壺（第10図No.2）底部は回転ヘラ切り無調整、器高4.0cm、内外面ともにロクロ調整である。③土師器（第10図No.3）いわゆる長脚甌で、口縁部は「く」の字形をしており口唇部に至るところに凹をもつ。外面の調整はロクロ調整で、体部下半はその後ヘラケズリであり、内面の調整はロクロ調整後、体部下半はその後ヘラナデ。④土師器甌（第10図No.5）③と同じ長脚甌で調整も同様であるが、口唇部に至るところに丸味をもつ。全体にすすが付着している。⑤土師器甌（第10図No.4）体部上半は直立し口縁部に至って、大きく外反し口唇部に至って直立ぎみとなる。内外面ともにロクロ調整、体部下半はその後ヘラケズリ。

陶磁器としては、中世陶器片3点と青磁1点が出土している。第12図No.1はV層より出土した赤褐色を呈する無釉陶器の甌の体部片で、内外面ともナデにより調整される。No.2は5号土壙から出土した無色からやや緑がかった自然釉が薄くかかった灰色の鉢形の陶器である。調整

V. II区の調査 1. 発見遺構

は内外面ともロクロによる。平安末期から鎌倉時代にかけての常滑産と考えられる。これと同一個体片が他に1点5号土壙から出土している。No.3はオリーブイエローの釉のかかった中国産青磁の碗で、内面には割花花卉文が描かれている。年代としては13~14世紀頃と考えられる。

VII. II区の調査

1. 発見遺構

II区における発見遺構は、V層上面で竪穴住居跡1軒(S I 1)、掘立柱建物跡1棟(S B 1)、土壙3基(S K 1・2・3)、溝3条(S D 2・8・9)、ピット数個、VI層上面で掘立柱建物跡1棟、溝2条(S D 5・6)、竪穴状性格不明遺構1基(S X 1)、VII層上面で溝2条(S D 3・4)、壁層上面では4個の柱穴からなる性格不明遺構1基(S X 2)、溝1条(S D 7)といった遺構がある。

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡 (S I 1)

〔確認面・重複〕 水田床土下の酸化鉄層を除去したV層上面で検出された。1号掘立柱建物跡及び8・9号溝に切られている。

〔平面形・規模・保存状況〕 調査区の拡張部においても、南辺及び西辺の全部と東辺及び北辺の一部を検出できず、その規模については不明である。検出部の範囲は東西4.27m・南北4.23mを計る。平面形は方形または長方形を呈すると考えられる。柱穴及び9号溝によって床面の一部が削平されているが、比較的保存は良い。壁は北側程保存が良く、南側程耕作による削平が深い。

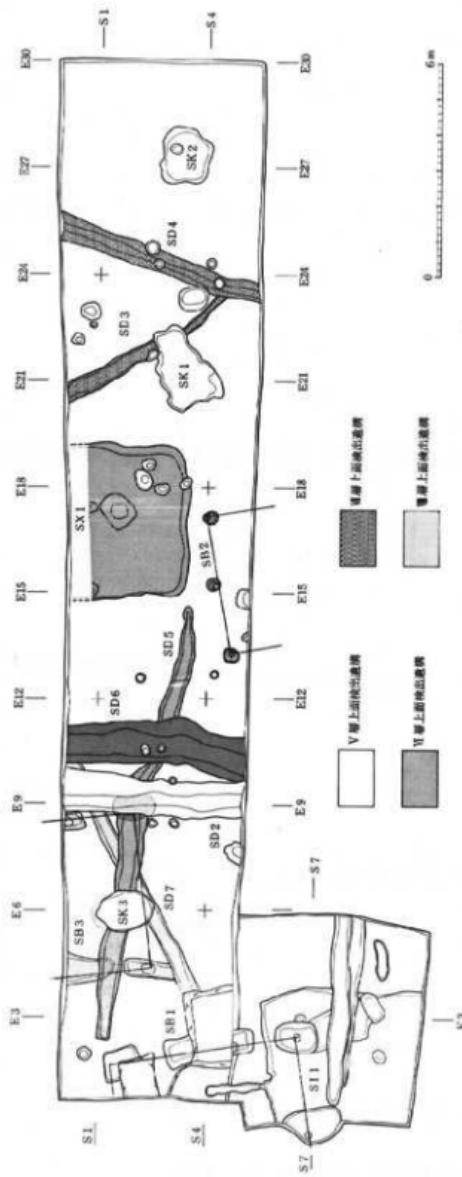
〔堆積土〕 堆積土はベルトの位置で18層に大別されたが、その大部分を占めるのが、2層と3層である。2層は暗褐色の粘土質シルト層で堆積土の上部を占め、3層は黒褐色の粘土質シルト層で堆積土の下部を占める。堆積土の厚さは北部で24cm、南部で12cmを計る。

〔壁・床〕 床面はほぼ平坦で、壁は床面より約70°の角度で立ち上がる。壁面の東辺北部は外方にわずかに張り出している。

〔柱穴〕 床面の検出範囲内においては、ピットが2個検出されたが、柱穴と考えられるものではなかった。竪穴内に柱穴があったとすれば、北東角のものについては、1号掘立柱建物のP 4によって切られている可能性が強い。

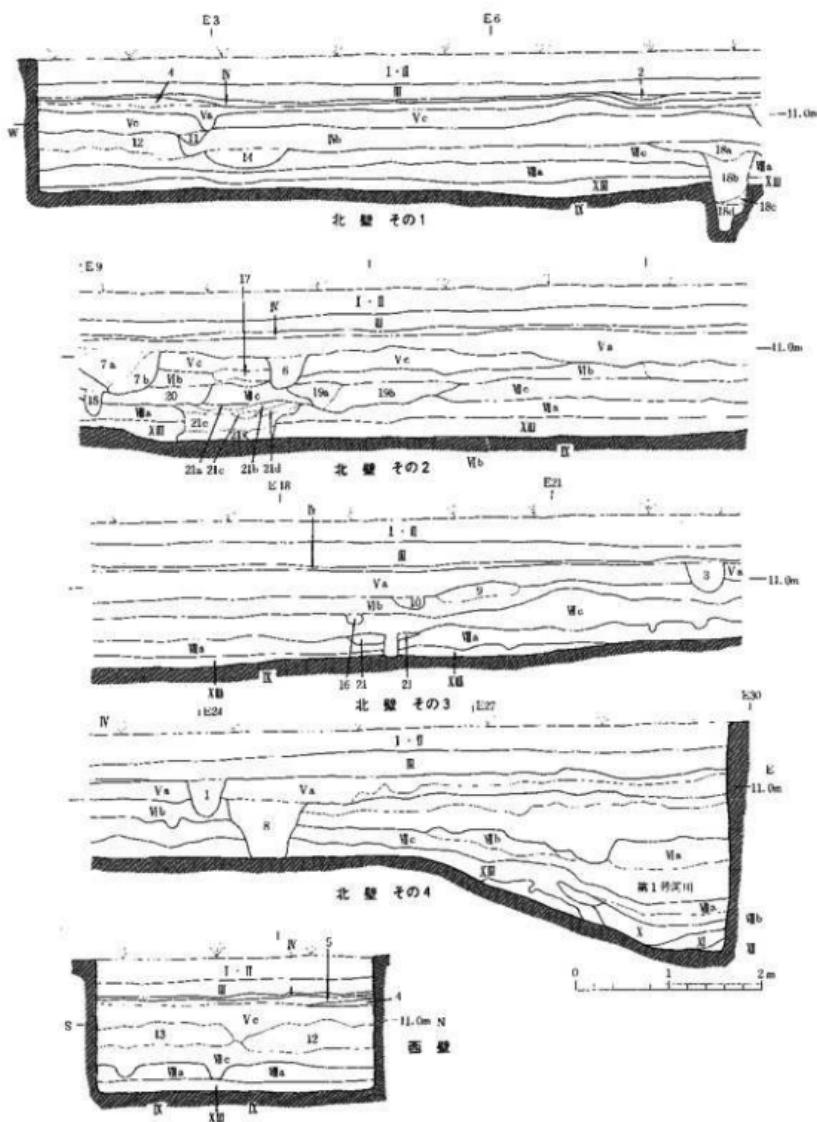
〔カマド〕 カマドは北壁と東壁にそれぞれ新旧の二基が検出された。

(1) 空穴住居跡



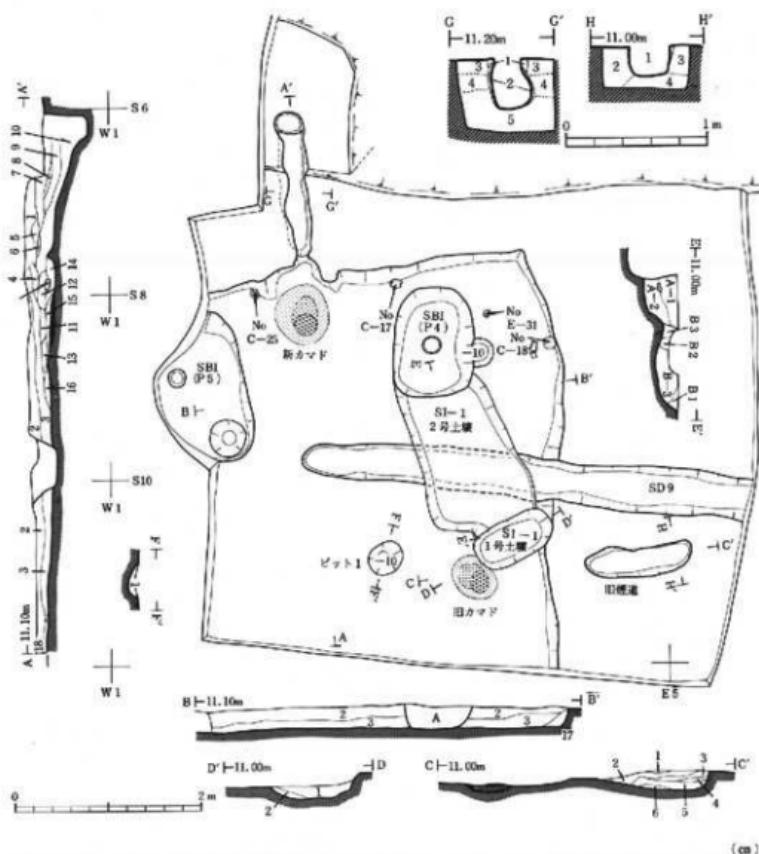
第13図 II区層位別遺構配置図

VII. II区の調査 1. 発見透構



第14図 II区西壁面及び北壁面図

VII. II区の調査 1. 発見遺構

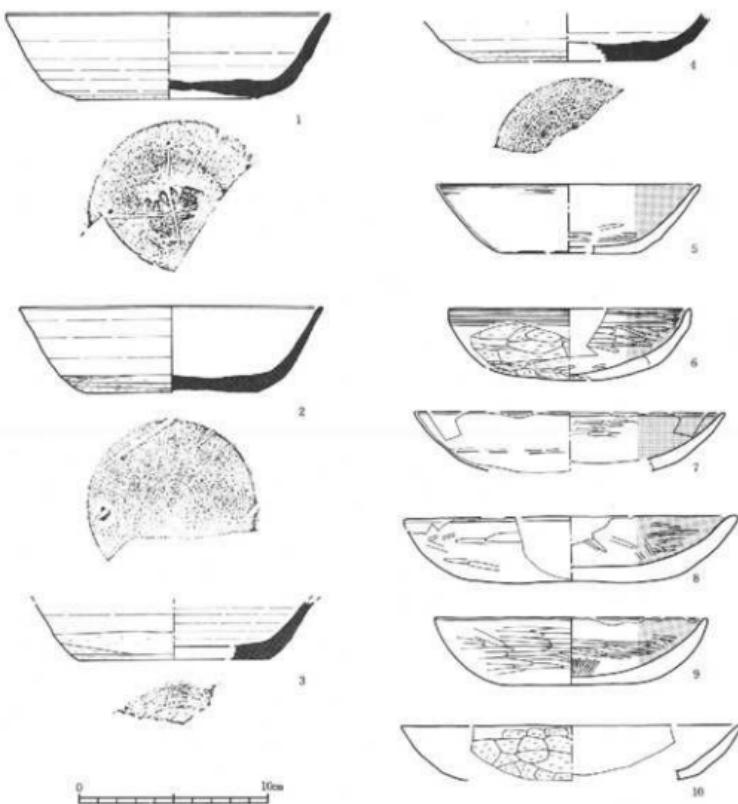


規 模	方 向	壁 留 存 高	カ マ ド	周 溝	主 掘 穴	兼 覆	備 考
南北軸 (423)	南北 軸	東 21	柱 直 北壁中央付近	なし		S 1 1	
N-2-W	西 -		燃焼部 (発96) × (発90)	床面高	不明	SD 6.9 SB 1	
東西軸 (427)	東 西 軸	南 -					
面 積	N-82-E	北 27	縦 通 156 × 30	10.80m			

番 号	土 色	土 質	そ の 他	番 号	土 色	土 質	そ の 他
1	10YR 2/4 黒褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土の少ブロックを多く含む	11	10YR 2/4 黒褐色	シルト質粘土	赤褐色焼土・液化物を少含む
2	10YR 2/4 喜褐色	粘土質シルト	灰・焼土・灰白色を含む	12	7.5YR 4/6 棕 色	灰・壤 土	焼土は大形のブロック
3	10YR 2/4 黒褐色	粘土質シルト	灰・焼土を少含む	13	7.5YR 4/6 棕 色	シルト質粘土	焼土や灰・灰・液化物を多量に含む
4	10YR 2/4 黒褐色	シルト質粘土	赤褐色・暗褐色・焼土を含む	14	10YR 2/4 黒褐色	粘土質シルト	焼土・灰・液化物を多量に含む
5	10YR 2/4 黒褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土の少ブロックを多く含む	15	10YR 2/4 黑 色	粘土質シルト	灰・液化物を多量に含む
6	10YR 2/4 喜褐色	粘土質シルト		16	10YR 2/4 黑褐色	粘土質シルト	
7	10YR 2/4 黑褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土を多く含む	17	10YR 2/4 黑褐色	粘土質シルト	マンガニン鉱を含む
8	10YR 2/4 喜褐色	シルト質粘土		18	10YR 2/4 黑褐色	粘土質シルト	褐色土を含む
9	10YR 2/4 黑褐色	シルト質粘土	焼土・灰を多量に含む	A	10YR 2/4 喜褐色	粘土質シルト	焼土・灰を含む
10	7.5YR 2/4 黑褐色	シルト質粘土	褐褐色焼土と灰を多量に含む	B	10YR 2/4 喜褐色	粘土質シルト	焼土・液化物を少量含む

第 17 図 1号住居跡実測図

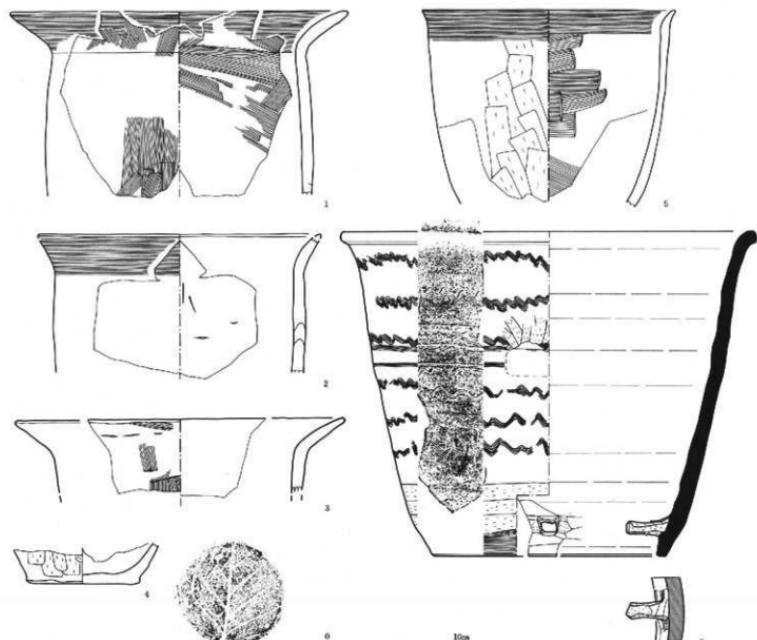
VII. II区の調査 1. 発見遺構



遺物 No.	種別	器形	層位	外 面 装 飾			内 面 装 飾			法 螺			焼 存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	基面	口径	地径				
1	直腹器	环	2層	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.5	17.0	9.4	有	E-29	35-4 36-2	
2	直腹器	环	2層	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.6	15.9	9.0	有	E-30	35-3	
3	直腹器	环	2層	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(3.0)	10.0	3.4	有	E-28		
4	直腹器	环	床底	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(2.4)		9.4	有	E-31		
5	土師器	环	2層	ヨコナギ	不 明	不 明	ホ ネ	ホ ネ	ホ ネ	ヘラミガキ	3.7	13.8 (7.0)	3.6	有	C-15	
6	土師器	环	2層	ヨコナギ	ケズリ	ケズリ	ヨコナギ	ヨコナギ	ヨコナギ	ヘラミガキ	4.8	12.6	8.3	有	C-16	37-2
7	土師器	环	S.K-2	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	(3.1)	16.3	3.6	有	C-20		
8	土師器	环	直直	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.5	17.4	7.3	有	C-17	37-5
9	土師器	环	直直	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.6	14.2	7.5	定形	C-18	37-4
10	土師器	环	カマド内	不 明	ケズリ	ケズリ	不 明	不 明	不 明	(2.8)	17.8	3.6	有	C-29		

第18図 1号住居跡出土土器(1)

(1) 脊穴住居跡



遺物 No.	種別 形態	厚さ mm	外 形			内 部			施 工			分類	壁厚mm	写真番号
			口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	底	口縫	施述			
1 土師器 壺	2層	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	(14.0)	25.2	円			C-22			
2 土師器 壺	直直	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	(10.5)	21.4	月			C-23			
3 土師器 壺	カマド内 ベタナラ	ヘラナラ	不 明	不 明	不 明	(5.0)	18.6	丸			C-24			
4 土師器 壺	カマド内 ケヌリ	ケヌリ	木葉痕	ヘラナラ	ヘラナラ	(2.0)	7.5	波形			C-25			
5 土師器 壺	2層	ヨコナラ ケヌリ	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	ヨコナラ ヘラナラ	(14.7)	19.0	円			C-21	37-1		
6 陶器器 瓶	直 口	ロクロ 液状化織 一部ケヌリ	ロクロ 一部ヘラナラ 一部ケヌリ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	24.5	31.0	17.6	円	E-22	36-1		

第19図 1号住居跡出土土器(2)

切りによる。切り離し後は底面と体部下端は回転ヘラケズリ調整されている。土師器は环・甕ともロクロは使用されていない。环は、丸底または丸底風平底のもので、底部と口縁部の境に沈線状の段を有し、口縁が内湾するものの(第18図No.7)と、底部から口縁部まで内湾して立つものの(第18図No.6・8・9・10)と、底部から口縁部まで外傾して立つものがある。土師器甕は体部上半4点と底部片1点がある。体部上半は体部と口縁部の接続部はほとんどくびれず、口縁部は幅が広く強く外に折れるもの(第19図No.1・3)と口縁幅が狭く軽く外反するものとがある。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され、体部内面はヘラナデ調整されるものが全てであるが、体部外面はヘラナデによるもの(第19図No.1・2・3)と、ヘラケズリによるもの(第19図No.5)がある。須恵器の瓶は孔部のすぼまる円筒形を呈し、孔部は単孔となっている。孔部の内面に孔端部より2cm程上に幅1.5cm・厚さ1cm・長さ約3cmの断面四角形の棒状の突起が付されている。突起は3本か4本と考えられるが、明らかでない。体部外面には、中央よりやや上に2条(条間約1.5cm)の沈線が巡ぐり、沈線の上には把手を受けたと考えられる剝離痕がある。沈線の上部と下部にはそれぞれ3段、計6段の波状沈線文が巡ぐらされている。なお、この瓶はカマド煙道端部埋土出土片と、住居跡埋土3層出土片等が接合したものであり、住居跡と直接関係のあるものとは考えられない。

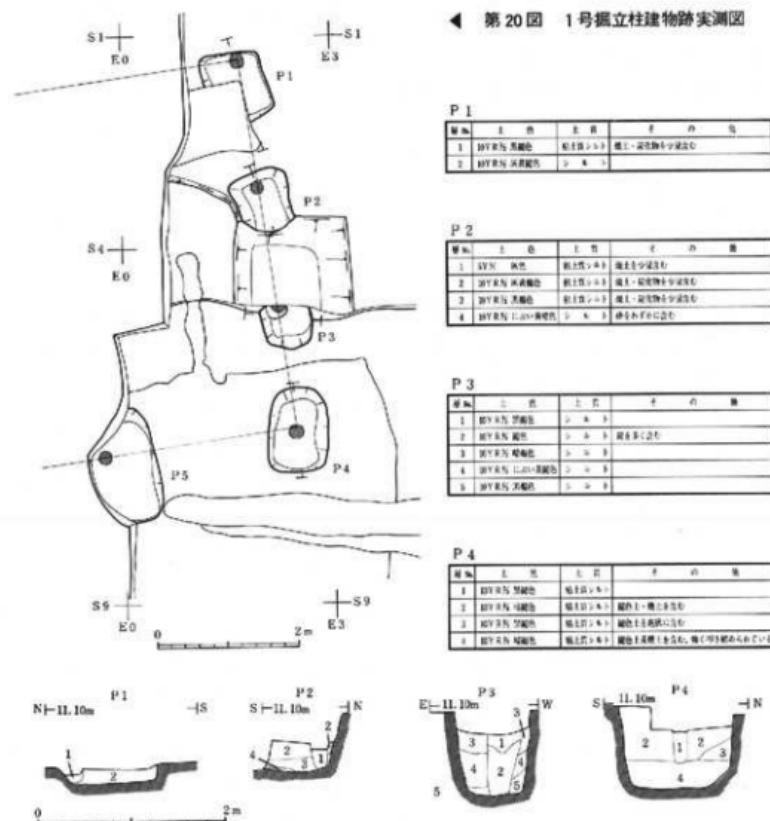
(2) 挖立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(SB 1)

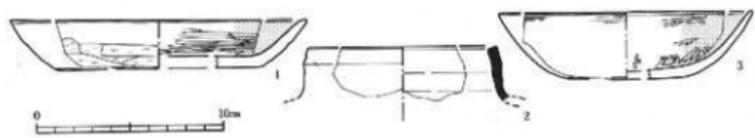
II区の西端及びその拡張区のV層上面で検出された。東列と南列の一部だけの検出であるが、東西棟建物跡と考えられる。東西桁行1間(275cm)、梁行3間(北より180+170+175cm)、桁行総長275cm以上、梁行総長525cmを計る。建物の方向はN-8°30'-Wである。柱穴掘り方は隅丸の方形または長方形で長軸が110cm~160cm・短軸70~85cmを計る。確認面の最も高い東列1南1の上面を基準とした深さは68~95cmである。ただし東列1南1(ピット4)については掘り方底面より30cmまでは柱を入れる以前に叩き詰めながら埋めているので、柱の底面までの深さは55cmとなっている。柱痕跡は平均直径19cmである。柱穴掘り方埋土は褐色から黒褐色を主体としたシルトまたは粘土質シルト層からなる。1号住居跡を切っている。

出土遺物には掘り方中より出土した106点の土器の破片がある。縄文土器片・土師器片・須恵器片があるが、図化できたのは、土師器环2点と、須恵器の短頸壺の口縁部片1点である。土師器环は、ロクロを使用していない丸底風平底のもので、底部から口縁部まで外傾して立ち上がる。実測した実物のうち、(第22図No.1・3)については、1号住居跡内の遺物を反映している可能性がある。出土遺物には図化したもの以外にロクロを使用した土師器の环及び甕があり、この遺構の年代については、このロクロ土師器の年代をもって考えるべきである。

VI. II区の調査 1. 発見造構



第20図 1号掘立柱建物跡実測図



第21図 1号掘立柱建物跡柱穴断面図

遺物	種別	形態	層位	内 容	内 容	内 容	内 容	内 容	内 容	操作	分類	量(m)	参考図版
1 土師器	罐	PH4 不明	ケズリ	ケズリ	不 明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.6	15.8(11.0)	焼	C-13		
2 泥漬器	壺	PH2 ロクロチヂ	不 明	不 明	ロクロサザ			(12.7)	10.0	焼	C-27		
3 土師器	罐	PH5 ロコチヂ	不 明	不 明	ロコチヂ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.6	13.4(6.2)	焼	C-14		

第22図 1号掘立柱建物跡出土土器

(2) 挖立柱建物跡

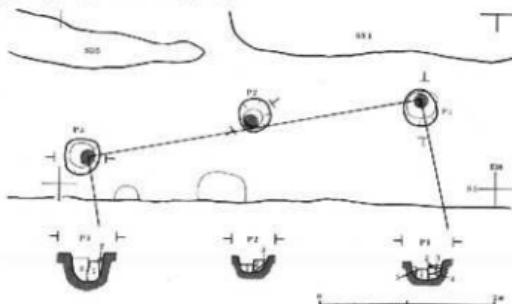
第5表 SB-1出土遺物集計表

種別	土 色						其の他	調査
	II 色	II 色	II 色	II 色	II 色	II 色		
無 残								
部 分	口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部
外 壁 調査	ヨコナデ	シガキ	ヤクシ	ハナメ	ヤクシ	ナメ	ヒメ	タマゴ
Pt1-1 縄文部	1			4	1	2	2	1
Pt1-2 縄文部				3	2		2	1
Pt1-3 縄文部	3			4	3	2	3	1
Pt1-4 縄文部	4	1	1	3	4	3	2	1
Pt1-5 縄文部	6	4	2	1	2	5	4	1
計	25		1	52		9	6	2
							1	7
							1	2
							3	1
							42	
								2
								105

2号掘立柱建物跡 (SB-2)

II区中央部南壁寄りのVI層上面で検出されたが、柱穴の深さ及び検出時の状況により判断するとV層上面から掘り込まれた可能性が強い。この建物の主体は調査区の南側にあり、調査区内からは北列が検出されただけである。これが桁行か梁行かは不明である（梁行の可能性が強い）が、東西2間（西より190+195cm）・総長385cmを計る。建物の方向はN-11°-Wである。柱穴掘り方はほぼ円形で直径40cm前後・深さ20~30cm、柱痕跡は直径15cm程である。掘り方埋土は、黒褐色から灰黄褐色の粘土質シルトからなる。

出土遺物には、縄文土器片2点・土師器片13点、計15点がある。土師器片のうちにはロクロを使用した壺の体部片があり、このことからも、この建物跡は、ロクロ使用土師器を出土する以前の1号住居跡の検出面であるV層より下のVI層が掘り込み面とは考え



第6表 SB-2出土遺物集計表

種別	土 色			其の他
	II 色	II 色	II 色	
無 残				
部 分	口縁部	口縁部	体 部	
外 壁 調査	ヨコナデ	シガキ	ナメ	ロクロ
Pt1-1 縄文部	1	1	3	
Pt2-1 縄文部	2	2	2	7
計	2	10	1	215

層 №	土 色	土 質	その他の
Pt1-1	10YR 8/6 黑褐色	粘土質シルト	鐵土・砂を含む
2	10YR 8/6 黑褐色	粘土質シルト	炭化物・鐵土を多く含む
3	2.5Y 8/6 黒オリーブ褐色	粘土質シルト	鐵土を少度含む
4	2.5Y 8/6 黒オリーブ褐色	粘土質シルト	
5	2.5Y 8/6 黒オリーブ褐色	粘土質シルト	
Pt2-1	10YR 8/6 黑褐色	粘土質シルト	炭化物・鐵土・砂を少度含む
2	10YR 8/6 黑褐色	粘土質シルト	炭化物・鐵土を多く含む
3	10YR 8/6 黑褐色	粘土質シルト	
Pt3-1	10YR 8/6 黑褐色	粘土質シルト	
2	10YR 8/6 黑褐色	粘土質シルト	炭化物・鐵土を多く含む

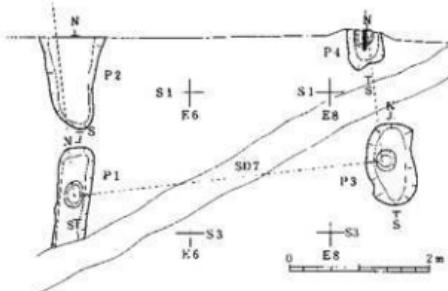
第23図 2号掘立柱建物跡実測図

られない。したがって、2号掘立柱建物跡の掘り込み面はV層より上の層であり、その年代については、ロクロ土師器出現以降の年代と考えられる。

VII. II区の調査 1. 発見遺構

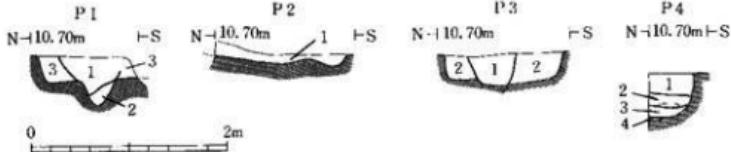
3号掘立柱建物跡

調査区西寄りの埴層上面で検出された。北側が調査区外にのびるため南北の間数及び、東西棟か南北棟かは不明である。南列の中央に柱穴は検出されない。東西1間で間尺は440cmを計る。南北は1間以上(180cm)である。建物の方向はN-6°30'-Wである。柱穴掘り方は一律ではないが、椭円形から長方形を呈し、長軸115~130cm・短軸45~90cmを計る。柱痕跡は抜き取りによって不明確になっているが、抜き取り穴の下部は直径25~30cmの落ち込みとなっている。柱穴掘り方埋土は褐色の粘土質シルトを主体としている。7分溝に切られている。出土遺物は、P4より木片が1点出土しただけである。



第24図 3号掘立柱建物跡平面図

番号	柱	土	柱	土
P2-1	W17.3m	灰褐色土	W17.3m	褐色土
P2-2	W17.3m	灰褐色土	W17.3m	褐色土
P3-1	W17.3m	褐色土	W17.3m	褐色土
P3-2	W17.3m	褐色土	W17.3m	褐色土
P4-1	W17.3m	灰褐色土	W17.3m	褐色土
P4-2	W17.3m	灰褐色土	W17.3m	褐色土
S1-1	W17.3m	褐色土	W17.3m	褐色土
S1-2	W17.3m	褐色土	W17.3m	褐色土
S2-1	W17.3m	褐色土	W17.3m	褐色土
S3-1	W17.3m	褐色土	W17.3m	褐色土
S4-1	W17.3m	褐色土	W17.3m	褐色土



第25図 3号掘立柱建物跡柱穴土層断面図

(3) 土 壤

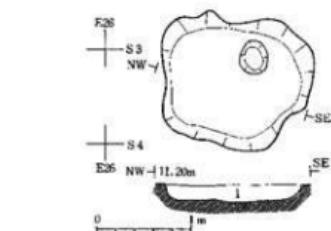
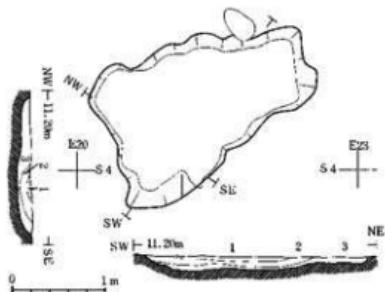
1号土壤

長軸230cm・短軸155cm・深さ17cmを計る不整形の土壤で、V層上面で検出された。底面には緩い起伏があり、壁面は大小の凹凸がある。堆積上は3層からなるが、このうち第2層には灰白色の火山灰からなる。

出土遺物には土師器と須恵器の細片が65点と、土錐が1点ある。土師器片にはロクロを使用した土師器片が含まれている。

2号土壤

長軸155cm・短軸140cm・深さ20cmを計る不定形の土壤で、V層上面で検出された。断面形



層 No.	土 色	土 質	そ の 他
1	10YR 8/4 暗褐色	シルト	マンガン鉱・灰白色火山灰を少量含む
2	7.5YR 8/4 淡褐色	火 山 灰	
3	10YR 8/4 暗褐色	粘土質シルト	

層 No. 土 色 土 質 そ の 他
1 10YR 8/4 暗褐色 シルト 灰化鉱・灰白色火山灰を含む

▲ 第 27 図 2号土壤実測図

◀ 第 26 図 1号土壤実測図

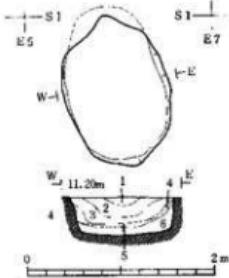
第 7 表 1号土壤出土遺物集計表

種 別	土 帯						須 惠 器						土 質
	環(非ロクロ)	环(ロクロ)	空(非ロクロ)	空(ロクロ)	杯	口	环(非ロクロ)	环(ロクロ)	須 惠 器	口	环(非ロクロ)	环(ロクロ)	
無 段			漆器軸・便器						粗面化粧・高脚				
部 位	口縁部-全体	口縁部-全体	ヘラ切り	体 部	体 部	L環部-全体	ヘラ切り	口縁部	口縁部	体 部	口縁部	口縁部	
外観調整	ヨコナギ(木楔)	ロクロ	無	ハサメ ケズリ ナギ	不明	ロクロ	ロクロ	口縁部-ヘラカズリ	無 文	ハサメ	ロクロ	タガキ	
量	1 支持器			1	6	9	6	14	8	5	1	2	4
位	2 錫片類	3 4	1	1	6	9	6	14	8	5	1	2	4
計		7	2	1	35	6	6	15	8	6	7	1	65

第 8 表 2号土壤出土遺物集計表

種 別	土 帯						須 惠 器						土 質
	環(非ロクロ)	环(ロクロ)	空(非ロクロ)	空(ロクロ)	杯	口	环(非ロクロ)	环(ロクロ)	須 惠 器	口	环(非ロクロ)	环(ロクロ)	
無 段													
部 位	口縁部-全体	ヘラ切り	体 部	口縁部-全体	口縁部								
外観調整	ヨコナギ(木楔)	不明	ケズリ ナギ	ロクロ	不明								
量	6	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	15
計	7	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	15

層 No.	土 色	土 質	そ の 他
1	10YR 8/4 暗褐色	シルト	炭化物・焼土を少量含む
2	10YR 8/4 暗褐色	シルト	炭化物・焼土・鐵色土を含む
3	10YR 8/4 暗褐色	シルト	焼土を含む
4	10YR 8/4 暗褐色	シルト	
5	黒 色	炭 化 物	炭の純層
6	2.5YR 6/4 黄褐色	粘土質シルト	炭化物・燒土粒を含む



第 28 図 3号土壤実測図

は、浅いU字状を呈す。底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立つ。底面の北東寄りには直径30cm・深さ10cmのピットがある。堆積土は1層で、暗褐色のシルト層からなる。

出土遺物には、縄文土器・土師器・須恵器の破片が合計15点ある。土師器片のなかにはロクロを使用した环の破片が含まれている。

3号土壤

長軸175cm・短軸110cm・深さ40cmを計る楕円形の土壤で、V層上面はほぼ平坦で、壁面は

V. II区の調査 1. 発見遺構

直立に近く、北壁はオーバーハングしている。堆積土は6層に細分されるが、このうち第5層は炭化物層である。堆積土中には焼土を含むが、壁面・底面とも焼けた形跡はない。

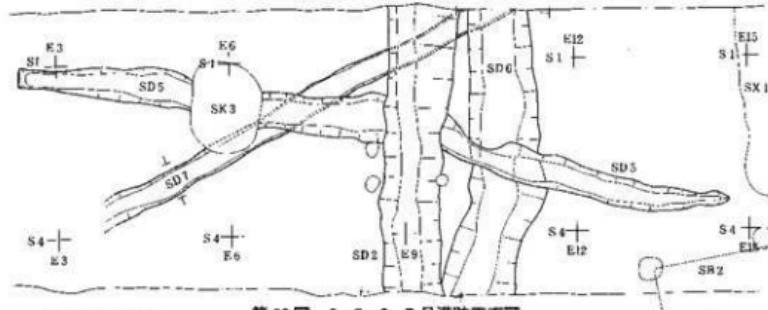
出土遺物はない。

(4) 溝 跡

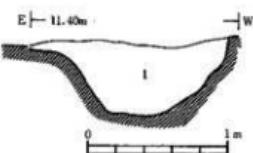
1号溝跡（矢番）

2号溝跡

V層上面で検出された。調査区中央西寄りを南北に横断する。上面幅は南側で110cm、北側で120cm、底面幅は35cm前後、深さ50cmを計る。断面形は舟底形から逆台形を呈す。底面に傾斜は認められない。方向はN-1°-Wを指す。堆積土は暗灰黄色砂質シルト1層からなる。5・6・7号溝を切っている。出土遺物は、縄文土器の細片が2点あるだけである。



第29図 2・5・6・7号溝跡平面図



第30図 2号溝跡断面図

3号溝跡

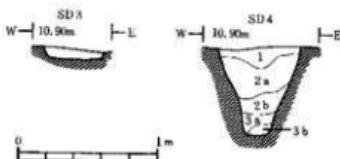
V層上面で検出された。調査区の東部に位置し、調査区を斜めに横断する。南端は4号溝によつて切られている。幅は北側ほど広く上面で50cm、底面で40cmを計るが、南側は上面幅20cm、底面幅10cmとなっている。断面形は浅い逆台形を呈し、深さは北部で15cm、南部で5cmを計るが底面に傾斜は認められない。溝の方向はN-30°-Wを指す。堆積土は暗褐色砂質シルト1層からなる。

出土遺物には、縄文土器と土師器の破片が計9点ある。土師器片にはロクロを使用した上師器片が含まれている。

第9表 SD-2出土遺物
集計表

種別	通文
器種	計
部位	
外周調整	
破片数	2 2
計	2 2

(4) 溝跡



第31図 3・4号溝跡断面図

第10表 SD-3出土遺物集計表

種別 器種	土部		縦文
	壺(非ロクロ)	壺(ロクロ)	
部位	体部	口縁部	体部
外側調整	不明	不明	ロクロ
層	1 磐片数	1	7
位	2 磐片数	1	1
位	3 磐片数	6	2
			9

No	No	土色	上質	その他の性質
3号-1	10YR5/6	褐色	砂質シルト	赤褐色粘土ブロック及び砂を含む
4号-1	25YR5/6	オリーブ褐色	砂質シルト	褐色色土を含む
	2号 10YR5/6	褐色	砂質シルト	
	3号 5YR5/6	灰オリーブー色	粗	発化鉄を多く含む
	2号 5YR5/6	灰オリーブー色	粗	砂

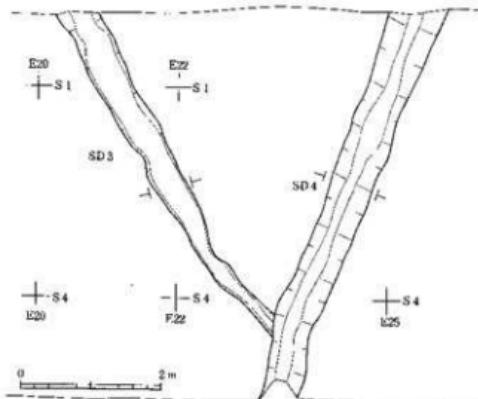
第11表 SD-4出土遺物集計表

種別 器種	土部		縦文
	壺(非ロクロ)	壺(ロクロ)	
部位	口縁部	体部	
外側調整	ヨコナデ	ケスリ	
層	1 破片数	1	2
位	2 破片数	1	4
位	3 破片数	1	2
			4

4号溝跡

V層上面で3号溝の東側に検出された。上面幅60cm、底面幅15~30cm、深さ60cmを計る。断面形は整った逆台形を呈す。底面は北側が数cm低くなっている。溝の方向はN-29°-Eを指す。堆積土は5層に細分されるが、上部3層は砂質シルト、下部は粗砂となっている。3号溝を切っている。

第32図 3・4号溝跡平面図 ▶



5号溝跡

V層上面で検出された。調査区の西半をやや蛇行しながら縱断する。東西両端は調査区内で浅くなり消えている。中央部では上面幅65cm、底面幅40cm、深さ10cmを計る。底面は西側が数cm低くなっている。溝の方向はN-82°-Wを指す。堆積土は暗褐色粘土質シルト1層からなる。2号溝に切られ、6、7号溝を切っている。出土遺物には、縄文土器、土師器、須恵器の破片が計8点ある。土師器片にロクロの使用さ

第12表 SD-5出土遺物集計表

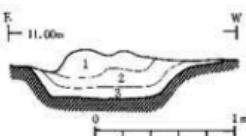
種別 器種	土部		縦文
	H(非ロクロ)	H(ロクロ)	
部位	口縁部-体部	体部	
外側調整	ミガキ	ケズリ 不明 ナツカサ	
層	1 破片数	1	8
		4	1
		1	2
		2	8

V. II区の調査 1. 発見遺構

れているものはない。

6号溝跡

VI層上面で2号溝の西側に検出された。調査区を南北に横断する。上面幅120cm、底面幅60cm、深さ30cmを計る。断面形は逆台形を呈す。底面はほぼ平坦となっている。溝の方向はN-1°-Eを指す。堆積土は3層に分けられ、黒褐色から灰黃褐色の粘土質シルトからなる。2、5号溝に切られ、7号溝を切っている。出土遺物はない。

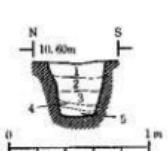


層 No.	上 色	上 質	その 他
1	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	深褐色粘土を既に含む
2	1.5YR 5/6 灰褐色	粘土質シルト	既存物・堆土を含む
3	10YR 5/6 黑褐色	粘土質シルト	既・既存物を含む

第33図 6号溝跡断面図

7号溝跡

VII層上面で検出された。調査区西部を北東から南西に斜めに横断する。北東端は、2、6号溝によって切られている。上面幅45cm、底面幅20~30cm、深さ40cmを計る。断面形は整った逆台形を呈する。底面は北東側が数cm低くなっている。堆積土は5層に細分され、最下層は4号溝と同様に砂層となっている。方向はN-60°-Eを指す。5号溝、3号土壙、3号掘立柱建物跡に切られる。出土遺物はない。



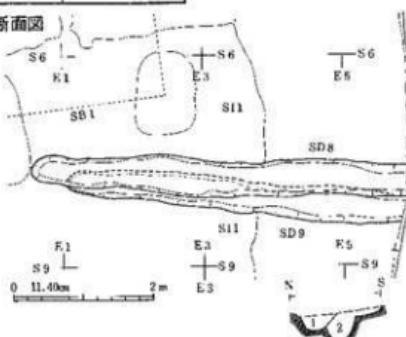
層 No.	上 色	上 質	その 他
1	10YR 5/6 黒褐色	砂質シルト	灰色粘土質紅色土を含む
2	10YR 5/6 灰褐色	粘土質シルト	灰色粘土を樹木に含む
3	25YR 5/6 黄褐色	砂	
4	10YR 5/6 黑褐色	粘土質シルト	鐵鉢を含む
5	25YR 5/6 黑色	細砂	深褐色土を夾状に含む

第34図 7号溝跡・断面図

8号溝跡

拡張部の5層上面で検出された。西端は拡張部西壁付近で立ち上がる。上面幅35cm、底面幅40cm、深さ10cmを計る。断面形はU字形を呈す。底面は東側が数cm低くなっている。方向はN-88°-Wを指す。9号溝、1号住居跡を切っている。

出土遺物には土師器片と須恵器片が各1点ある。土師器片はロクロによる調整痕が認められる。



層 No.	上 色	上 質	その 他
1	10YR 5/6 黑色	粘土質シルト	炭・赤褐色土を含む 8号溝跡
2	10YR 5/6 黑色	粘土質シルト	黄褐色粘土を含む 9号溝跡

第35図 8・9号溝跡実測図

(4) 溝 跡 (5) 性格不明遺構

第13表 SD-8 出土遺物集計表

種別	土器		須恵器		計
	外表面	内表面	外表面	内表面	
部位	外表面	内表面	外表面	内表面	
外表面	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	
破片数	1	1	2	1	2
	1	1	2	1	2

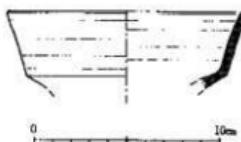
第14表 SD-9 出土遺物集計表

種別	土 器			須 恵 器			調文
	外表面	内表面	外表面	内表面	外表面	内表面	
部位	外表面	内表面	外表面	内表面	外表面	内表面	
外表面	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	
破片数	7	2	7	7	1	1	1
実測数	7		17	2	1	1	1
	1	2	1	1	4	1	33

9号溝跡

拡張部のV層上面で、8号溝の南側に同溝に切られて検出された。西端も8号溝の切れる所のやや手前で8号溝と同様に立ち上がる。上面幅45cm、底面幅30cm、深さ10cmを計る。断面形はU字形を呈す。底面に傾きは認められない。方向はN-84°-Wを指す。1号住居跡を切る。

出土遺物には、縄文土器、土師器、須恵器片、計33点がある。このうち実測できたのは高台付环と考えられる須恵器片が1点だけである。(第36図) 土師器片にはロクロ調整痕のあるものが含まれている。



第36図 II区 9号溝跡出土土器

遺物 No.	種別	器 形	部位	外 围 調 痕		内 围 調 痕		法 縫		残存	分類	登録No.	写真回数
				外表面	内表面	外表面	内表面	口縫部	体 部	底 部	口縫部	体 部	底 部
1	須恵器	高台付环	I層	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(4,2)	12,7		残存	II-33	

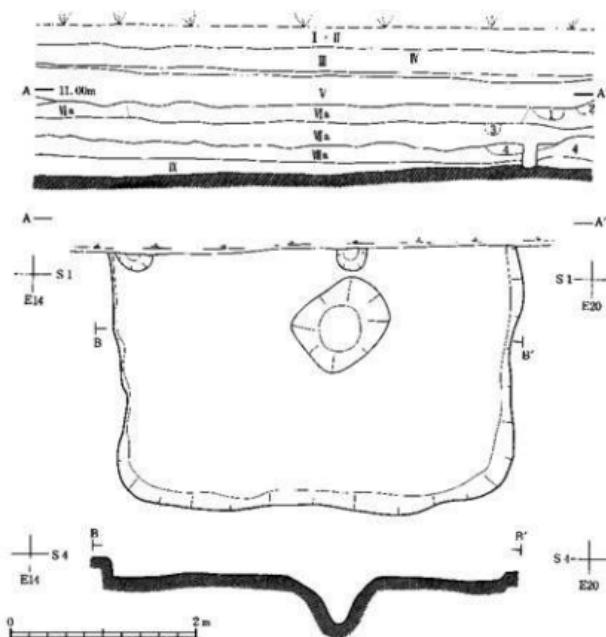
(5) 性格不明遺構

1号性格不明遺構

II区の中央部の6層上面で検出された。北辺及び東西両辺の北端部は調査区外へのびる。平面形は方形を呈し、竪穴住居跡に類似したプランとなっているが、カマド、柱穴、及び床面の汚れ等住居跡と認定できるものがなく竪穴状の遺構である。底面はほぼ平坦で、壁面は西辺が直立するほか、南側と西側は緩く立ち上がる。確認面からの深さは10~20cmを計る。底面の中央付近には直径約90cmの逆円錐形の土壠がある。その他底面には2個のピットが検出されている。

第15表 SX-1出上遺物集計表

種別	土 器			須 恵 器			調文
	外表面	内表面	特	外表面	内表面	特	
部位	外表面	内表面	特	外表面	内表面	特	
全体	口縫部 - 体 部	山脚部	体 部	外表面	内表面	底 部	
外表面	ロクロ	木炭	ハサミ	ナズリ	ナゼ	木炭	
裏面	ヨコナメ	木炭	ハサミ	ナズリ	ナゼ	木炭	
1	2	2	30	30	65	1	
実測	1						
2	1	1	1				
3	1						
	19		89	6	1	3	19
							9 222



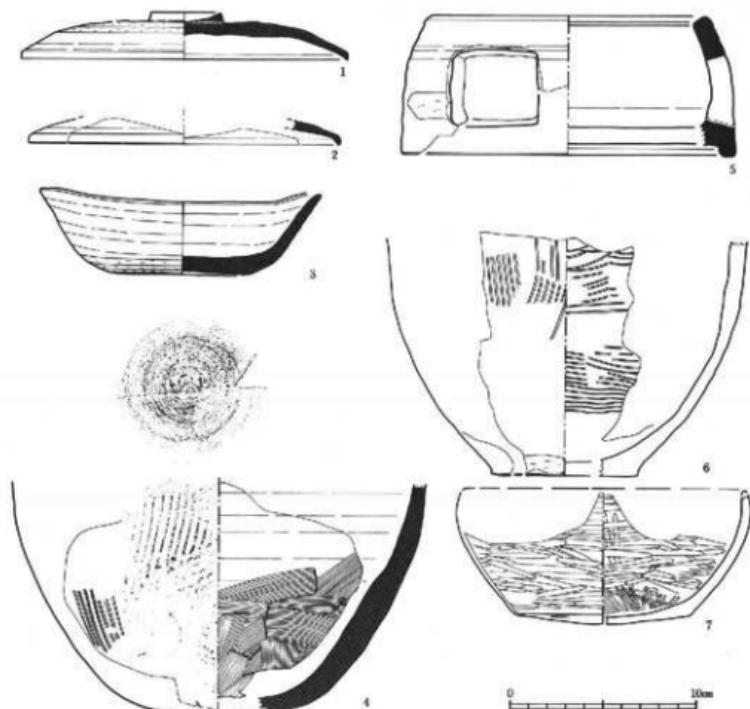
第37図

1号性格不明遺構実測図

層番	上 色	I. 質	その他の
Ⅲ	2.5YR 4/6 黄褐色	シルト	粘土質灰土 炭化物を多く含む(水田灰土)
Ⅳ	7.5YR 4/6 深褐色	シルト	炭化物を多く含む遺物を含む
V	10YR 4/6 黄褐色	シルト	炭化物・焼土を含む遺物を多く含む
VIa	10YR 4/6 黄褐色	粘土質シルト	灰褐色の粘土を帯びる遺物を含む
VIb	10YR 4/6 に少し黄褐色	粘土質シルト	灰褐色の粘土を含む遺物を含む
VIIa	25YR 4/6 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を含む遺物は出土していない
VIIb	褐色	粘土質シルト	遺物は出土していない
1	10YR 4/6 黄褐色	シルト	灰色粘土を含む
2	10YR 4/6 黑褐色	シルト	白色鉛錠を含む
3	10YR 4/6 單褐色	シルト	
4	10YR 4/6 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土を斑状に含む

出土遺物は1～3層中に縄文土器、土師器、須恵器の破片が252点出土した。実測できたものには、須恵器蓋2点、环1点、甕1点、異形土器1点、土師器环1点、甕1点の計7点がある。(第38図) No.1の蓋は断面が三角形のリング状のつまみを有するもので、端部は短かく下方に折れる。外面の天井部は回転ヘラケズリ調整されている。No.3の环は口径に比して底径が大きく、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整され、底部との境は不明瞭となっている。No.4は小形の甕で、外面は平行叩キ後、上部ロクロ調整され、内面はロクロ調整後ド

(5) 1号性格不明遺構



遺物 No.	種別	器形	部位	外 壁 調 整			内 壁 調 整			法 尺			残 存	分類	登録No.	写真図版
				口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	器高	口 径	底径				
1 漢志器 蓋	蓋	1番		天 井	つまみ	ロクロ	天 井	つまみ	2.5	17.2	つまみ	5%	E-36	35-9		
2 - - -	-	-	天 井	ロクロ			天 井	ひテリ	4.4	38.5		3%	E-36			
3 - 手	-	ロクロ	ロクロ	同様ヘラ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.5	34.9	7.5	実 形	E-34	35-1		
4 - 盖	-	平行タコ ロクロ	平 面	上端ロクロ 下端ヘラナデ	不 明	(12.2)	不 明	ヘラナデ	22		22	22	E			
5 - 瓢形	-	ロクロナデ 一端ケズリ	不 明	ロクロナデ	不 明	7.4	14.6	17.6					E-38	35-11		
6 土師器 甕	甕	-	ハケメ ケズリ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ	(12.2)		7.4		36	C-27				
7 - 手	-	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	7.0			9.4	36	C-26					

第38図 1号性格不明遺構出土土器

部がヘラナデ調整されている。No.5は高さ7.4cm、直径17.6cmを計る口縁の内傾する土器で、体部には縦約4cm、横約5cmの方形の透孔を有する土器である。口縁端部は平らで、やや内傾している。底部には体部からそのままのびた台が付く。底部はほとんど欠損しているため、これがあったのか、孔が穿たれていたかは不明である。No.6は甕の体部下半の破片で、外面はハケ

V. IIの調査 2. 造構以外のII区出土土器

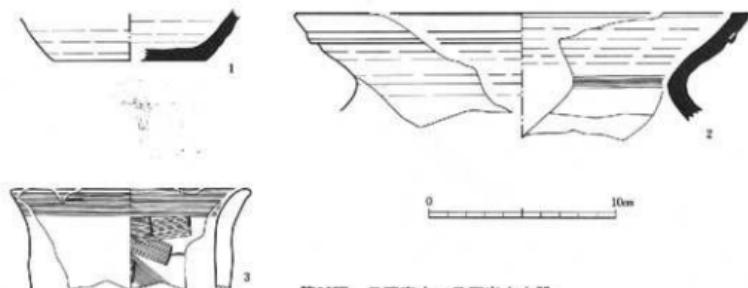
メ調整、内面はハケメ状工具によるヘラナデ調整されている。No.7は丸底風平底のロクロを使用しない环で、底部から内弯ぎみに立ち上がる。内外面ともヘラミガキ調整される。

2. 造構以外のII区出土土器

本調査区においては、表土からV層に至るまで、多くの遺物が出土している。縄文土器片を除く土師器、須恵器片で実測できたのは以下の通りである。

(1)表土出土土器

須恵器坏1点、土師器壺1点が出土している。須恵器坏は回転ヘラ切り後ナデ状の調整がされる。底径が比較的小さな破片である。底面に左半部を欠損するが「富」と読めるヘラ抽き文字がある。(第39図No.1)、土師器壺は口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデにより調整され、口縁部は軽く外反する。(第39図No.3)



第39図 II区表土・II層出土土器

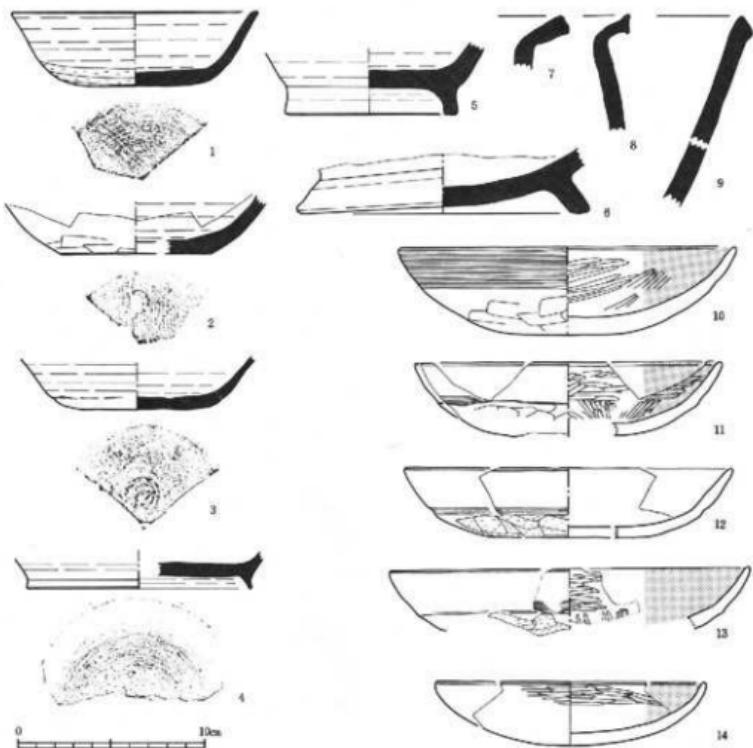
遺物 No.	種別	器形	層位	外 面 調 整			内 面 調 整			諸 素			横 幅	分類	登録番 号	写真図版
				口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	高 底	口 径	底 径				
1	須恵器	H 壺	表土	ロクロ			回転ヘラ切 不 明	ロクロ	22.31	22.3	8.0	5	E-3	36-3		
2	-	壺	II層	ロクロ	ロクロ			くびれ部 ヨコナデ		8.7	22.6		口 縁 5	E-4	35-6	
3	土師器	-	表土	ロクロ	チ ア	チア	ロクロ	ヘラナデ	15.4	12.8		口 縁 5	C-5			

(2) II層出土土器

須恵器壺片1点がある。肩部から口縁にかけての破片で、口縁部は一度外反した後内弯ぎみに立ち上がり、口唇部は平坦になっている。外面の口唇直下には山形の突帯が巡っている。

(3) V層出土土器

須恵器坏4点、壺類5点、土師器坏5点が実測できた。(第40図)



遺物 No.	種別	目次	形状	外面 説明			背面 説明			側面 説明			法 長	幅	厚	分類	層位No.	写真図版
				口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	口部	口径	底径						
1	頭忠器	环	5周	ロクロ	上部はクロ 内輪はラブリ	回転ヘラ切	セクロ	ロクロ	ロクロ	4.0	13.1	7.0	%	E-5	35-2			
2	-	-	-	ロクロ	上部はクロ 内輪はラブリ	セラケズリ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(3.1)	(8.0)	(4.0)	%	E-7				
3	-	-	-	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	0.6	5.0	5.0	%	E-6				
4	-	漆有材环	-	ロクロ	静止系	回転ヘラ切	セクロ	ロクロ	4.31		11.9		%	E-8				
5	-	漆付器	-	ロクロ	回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	ロクロ	(4.5)		7.9		%	E-13				
6	-	-	-	ロクロ	ロクロ	平行タスキ	ナザ		0.21		13.4		%	E-12				
7	-	實	-	ロクロ			ロクロ						%	E-9				
8	-	-	-				-						%	E-10				
9	-	-	-				-						%	E-11				
10	土師器	环	-	ヨコナヂ	タズリ	タズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.7	17.8	15.6	%	C-6	37-1			
11	-	-	-	ヨコナヂ	サザケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.61	16.2		%	C-7				
12	-	-	-	ヨコナヂ	タズリ	タズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(0.7)	17.2	13.8	%	C-8				
13	-	-	-	ヨコナヂ	タズリ	タズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(0.8)	19.7		%	C-9				
14	-	-	-	ヘラミガキ	タズリ	タズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.4	14.2	11.8	%	C-10	37-3			

第40図 II区 V層出土土器

VI・II区の調査 2. 造構以外のII区出土土器

No.1は口径に比して底径の大きな环で、底面から体部下端にかけて回転ヘラケズリ調整されている。底部と体部の境は不明瞭である。

No.2は、静止糸切り後底部縁辺から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整されている。

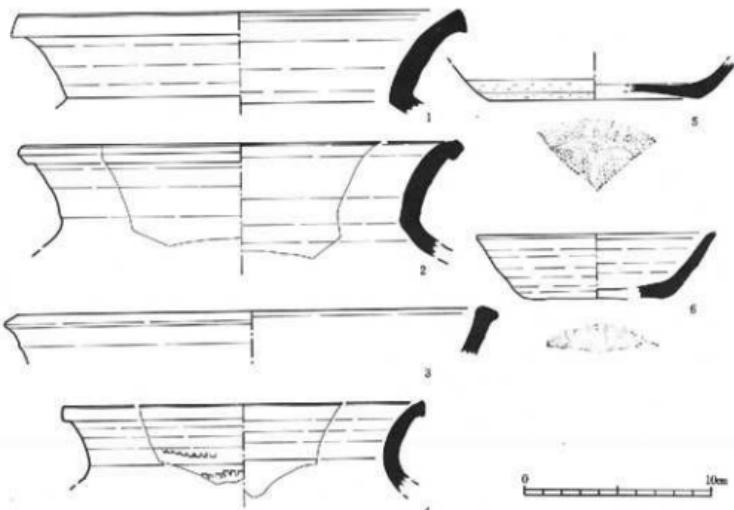
No.3は、回転ヘラ切り無調整の底部片である。底部と体部の境は丸くなっている。

No.4は、高台付环の底部片である。底部は静止糸切り後回転ヘラケズリ調整されている。

No.5, 6は、壺または壺の高台付底部片で、No.5は内外ともロクロ調整され、No.6は平行叩き痕の底部にリング状の台を付けている。

No.7, 8は、壺または鉢の口縁部片の断面で、内外面ともロクロ調整される。

No.9～14の土器器環はいずれもロクロを使用しないもので、No.9～13は丸底で、底部と口縁部の境にわずかな段を有し、口縁が内弯する。調整は外面口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ、内面ヘラミガキされる。No.14は丸底の底部から内弯ぎみに立つもので、内外面ともヘラミガキ調整されている。No.12は再酸化されて内面の黒色処理が失われている。



遺物 No.	種別	基形	着仕	外 面 調 整			内 面 調 整			底 部		底 高	口 径	壁 厚	残 存	分類	世 紀	写 真 回 数
				口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	底 部	口 径							
1	調整器	環	5～6層	ロクロ			ロクロ			[0.1]	29.8		丸		E-16			
2	-	-	-	ロクロ			ロクロ			[5.4]	29.2		丸		E-17			
3	-	-	-	ロクロ			ロクロ			[2.6]	26.4		丸		E-23			
4	-	-	-	ロクロ	ヤキメ		ロクロ			[4.2]	19.2		丸		E-18			
5	-	环	-	ロクロ	回転糸切 手持ヘラ		ロクロ	ロクロ	ロクロ	[1.9]	31.2		丸		E-19			
6	-	-	-	ロクロ	ロクロ	不規	ロクロ	ロクロ	ロクロ	3.5	12.6	[7.0]	丸		E-15			

第41図 II区V～VI層出土土器

(3) V層出土土器 (4) V~VI層出土土器 (5) VI層出土土器

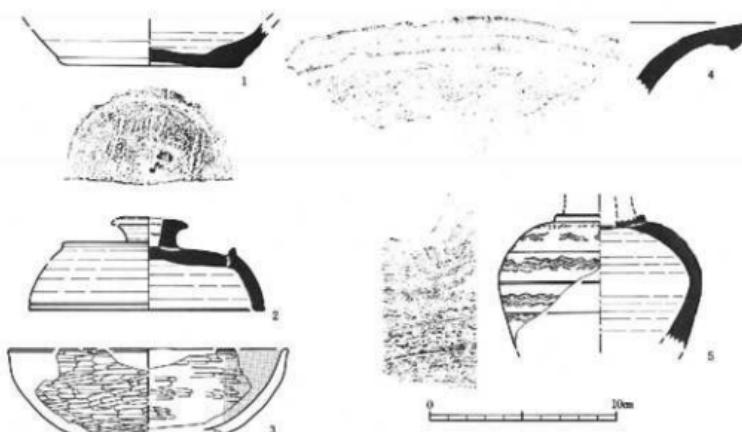
(4) V~VI層出土土器

これは、取り上げ時に混乱があり、V層中のものかVI層中のものか不明のもので、甕の口縁部片4点、环の破片2点が実測できた。

No.1~4の甕はいずれもロクロ調整されるもので、端部はわずかに肥厚し、それぞれ個性的な形態となっている。

No.5は、静止系切り後底部周縁及び体部下端が回転ヘラケズリ調整される。

No.6は、底部の切り離し技法は不明で、ナデ状の調整が行なわれている破片である。



遺物 No.	種別	器形	層位	外 周 長		内 壁 深		甕 壁		底 面		残存 分量	分類	壁面No.	写真図版
				口縁部	体 部	底 部	口縫部	体 部	底 面	巻高	17径	底径			
1	須恵器	甕	V層	ロクロ	回転ペラ切	ロクロ	ロクロ	4.8	8.8	円		E-20			
2	~	蓋	~	ロクロ	天井 つまみ	天井 ロクロ	つまみ	5.0	12.5	波紋	4.1	円	E-21	35-8	
3	上脚器	環	~	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6	4.6	円		C-11			
4	須恵器	甕	~	ロクロ	波紋文	ロクロ							E-22	35-7	
5	~	蓋	~	波紋文 斜文	波紋文 斜文	波紋文 斜文	ロクロ		0.2	5.0	10.8	円	E-26	35-10	

第42図 II区 VI層出土土器

(5) VI層出土土器

VI層からの出土品では、須恵器の环、蓋、甕、壺が各1点と土師器の环1点が実測できた。

No.1は、回転系切り無調整の环底部片である。底部と体部の境は明瞭となっている。

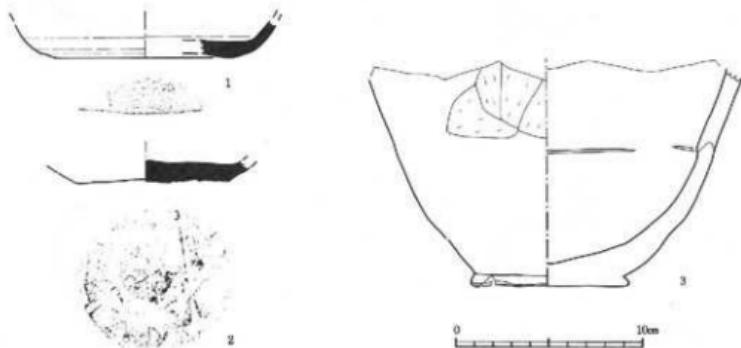
No.2は、口径に比して深い造りの蓋で、わずかに傾斜する天井部には内弯ぎみに下方へ折れる幅の広い口縁がつく。天井の縁辺部には山形の断面形を呈する突帯が巡ぐり、つまみはリング状の高いもので、上端が外方に帳り出している。

V, II区の調査 2. 造構以外のII区出土土器 3. その他のII区出土遺物

No.3は、丸底の壺で底部から口縁に至るまで内寄して立ち、口縁端部がわずかに外反する。調整は内外面ともヘラミガキによる。

No.4は、甕の口縁部の破片で、端部は上下に肥厚する。口唇直下には波長の長い波状沈線文が2段に施されている。

No.5は小形の壺で、体部には1.6~1.7cm間隔に3条の沈線が巡り、その沈線間及び上下に波状沈線文が抽かれ、沈線の下部には2段に波状沈線が配され、波状文は計5段に巡っている。また、最上部の波状沈線文の上・肩部には1段の棒引き連点文が施されている。体部と頸部の境には低い隆帯が一条巡っている。



遺物 No.	種別	器形	部位	外 壁 調 整			内 壁 調 整			法 線	径 寸	残 存	分類	登録No.	写真回数
				口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部						
1 土師器	壺	片	I層	ロクロ	回転未切		ロクロ	ロクロ	ロクロ	9.4	片		E-24		
2	-	-	-	ロクロ	不 明	回転ヘラカ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	7.5	底 部	完形	E-25		
3 土師器	甕	-	-	ヘラケズリ	不 明	下端ヘラテア	01.0	01.0	01.0	7.9	片		C-12	37-8	

第43図 II区Ⅶ層出土土器

(6) VII層出土土器

須恵器壺2点、土師器甕1点が実測できた。

No.1は、静止糸切りと考えられる壺の底部片で、切り離し後は調整を受けていない。

No.2は、回転ヘラ切り無調整の壺底部片で、棒状のものの圧痕が付いている。

No.3は、甕の体部下半の破片で、外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデ調整が認められる。底部下端は外側に張り出している。

基本層中から出土した遺物のうち実測可能な破片には以下のようなものがある。ただし、V層上面が1号住居跡一ロクロ使用以前の土師器出土（国分寺下層式）の一の確認面であるにもか

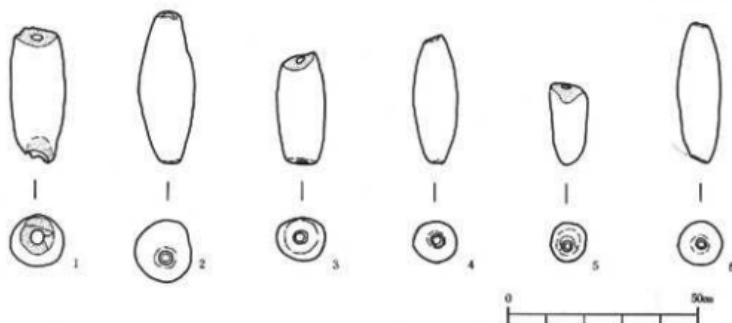
(6) 罩層出土土器 (1) 土 錘 (2) 小形手捏ね土器

かわらず、V～Ⅵ層中からも調査中に検出できなかった擾乱壙またはピットへの混入品と考えられるロクロ土師器（壺・甕片）が出土しているので、図示した遺物が必ずしも基本層の年代を反映せず、上層からの混入遺物も含まれている可能性がある。

3. その他のⅡ区出土遺物

(1) 土 錘

土錘は第44図に示した6点のうち5点がⅡ区から出土している。遺構から出土したのはⅠ区1号土壤1層からNo.6だけで、他はⅡ区Ⅳ～VI層中より出土している。形態は中央がやや脹らむ長さ3.4～4cm、直徑9～16.5cmの円錐を呈するもので、大きさとしては小形のものである。表面に特に調整痕はなく掌で粘土をまるめ、中軸に片方より孔を穿って作製したようである。



No.	出土遺構層位	登録No.	長さ	直 径	孔 径	重 量	色 調	残存状況	
								(mm)	(g)
1	IV層	P 1 (36)	13.5×14	3.5	6.8	浅黄橙色	両端一部欠損		
2	IV～V層	P 2	40	14.5×16.5	2～3	7.0	にぶい黄橙色		
3	V～VI層	P 4 (30)	11.5×13	2.5～3.5	4.8	にぶい黄橙色	一端一部欠損		
4	VI層	P 5	34	11×11.5	2.5～3	4.2	灰白～明褐色		
5	VI層	P 6 (22)	9×10	2～2.5	1.8	にぶい黄橙色	約1/3欠損		
6	Ⅰ区SKH	P 7	37	11.5×12	2～2.5	4.1	にぶい黄橙色		

第44図 土錘実測図

(2) 小形手捏ね土器

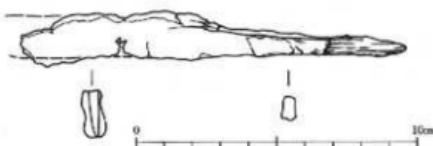
V層中より1点だけ出土した。口縁部は欠損している。底部は2.5cmを計る。内外面とも指で押えた痕跡が認められる。



第45図 小形手捏ね土器

(3) 刀子

調査区両端角近くのS 1とE 3の交点下の6層中で検出された。銹化が進み鋒は欠損している。残存長13.7cm、刀幅1.7cm、背幅0.6cm、茎長7.1cmを計る。平背で、闊には背側

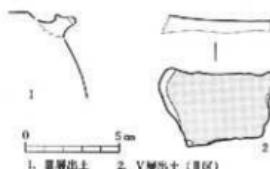


第46図 刀子

にわずかな段があるが、刀側には段差が認められない。茎の端部3cmには酸化鉄が吸着した木質が残っている。

(4) 陶 琉

II層中とV層中より各1点の破片が出土している。第47図No.1は円面観の周縁部と考えられる小片で、端部の上面にはやや内側した小突起が巡っている。No.2は琉面の破片で全面が平滑になっている。



第47図 陶 琉

この他縄文土器片、石器も出土しているが、これについては後述する。

VII. ま と め

1. 出土遺物の総括

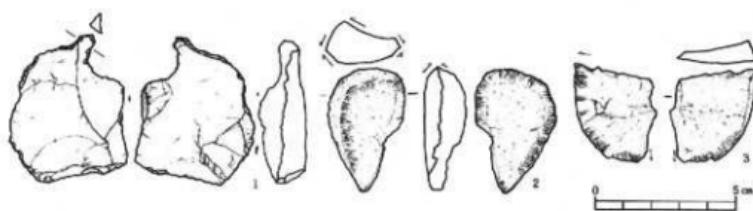
I区・II区の調査において出土した遺物には、石器・縄文土器・須恵器・土師器・土錘・刀子・陶琉・中世陶器・青磁がある。これらの出土遺物については、それぞれ以下のように考察される。

(1) 石 器

I区からスクレイバー1点、II区V層から、スクレイバー、二次加工がある石器、石核が各1点、V～VI層から石錘1点、SD-1埋土から不明石器が2点、合計7点出土した。

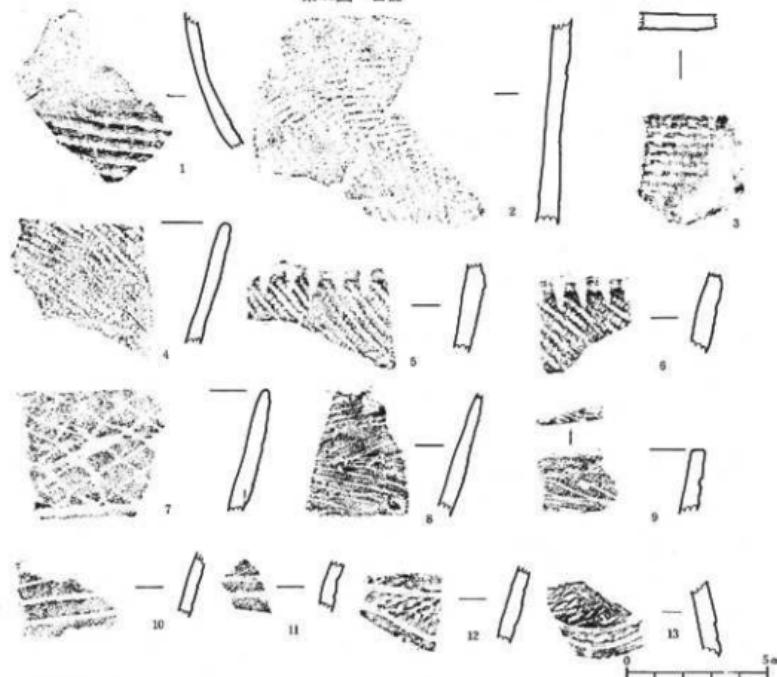
石材は、頁岩、凝灰岩、メノウ等である。

(3) 刀子 (4) 陶器 (1) 石器



番号	地区	遺構	層位	名 称	石 材	備 考	登録No	写真図版
1	II区		5~6	石鏃	真岩		K-5	39-6
2	II区、SD 1	埋土	不明	凝灰岩		鋭利な刃物をといだ	K-6	39-5
3	*	*	*	*	*	ような使用痕がある	K-7	39-4

第48図 石器



層分	区	層位	文様	回文(周)	4	5	6	7	8	9	1~6	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
1	I	5	無人(周縁)	1	5	1	7	*	6	9	1	6	*	8	12	1	5	不明+波線	12					
2	II	7	無人(周縁)	2	6	1	5	*	3	10	1	5	無人+波線	10	13	1	5	*	13					
3	II	SD-4 以上	網文	14	7	1	5	無人(周縁)	4															

第49図 織文土器拓影

(2) 繩文土器

基本層位、遺構埋土から出土しているが、基本層位に限定して述べる。(第16表)

I 区は V 層から 16 点、II 区は V~VI 層から 152 点、合計 168 点出土した。磨滅が著しく、縄文か撫糸か判別しがたいものが 96 点ある。地文は無節縄文・単節縄文・羽状縄文・単節撫糸文・網目状撫糸文・無文があるが、単節縄文が 35 点と全体の 20.8% を占める。特徴的なものは、拓影を作成したが (第49図)、図版番号 7・8・9 は縄文後半期に帰属する可能性があるが、小破片のため、確証はない。他に、縄文中期に属すると思われる把手が II 区の V 層から 1 点出土している。

第16表 基本層位出土縄文土器片集計表

区	層位	無文	不明	縄文		羽状縄文		撫糸		沈縄 無文	沈縄 不明	把手	合計
				無節	単節	無節	単節	單節	網目(単節)				
I	V		6	9				1					16
II	V	1	54	10	18			2		2	2	1	90
	V~VI		1					1					2
	VII		25	2	3				2				32
	VIII		10	1	14			1	2				28
小合計		1	96	22	35			1	5	3	2	1	168
表採		1	3	3	2								9
合計		2	99	25	37			1	5	3	2	2	177

(3) 須恵器

多くの破片が出土したが実測できたのは、37 点である。器種としては、壺・蓋・壺・甕・瓶、異形のものがある。

〔壺〕

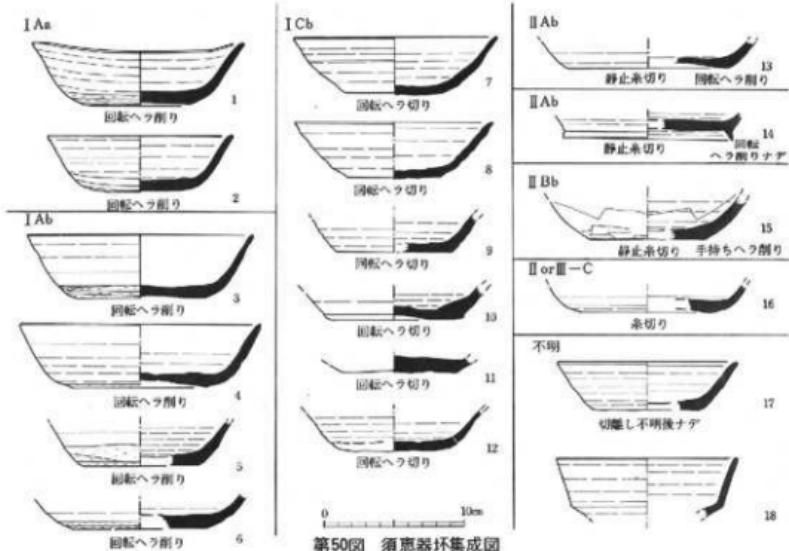
壺は 18 点実測できたが、切り離し技法・切り離し後の調整及び器形の特徴により、第17表の分類基準に従って分けると、第50図に示したような組み合わせによる分類が可能である。第50図No.16・17については切り離し技法が不明確なので分類できない。また 18 は底部を欠損しているので分類の対象外である。

第17表 須恵器壺の分類基準

1. 切り離し技法による分類		2. 切り離し後の調整による分類		3. 底部と体部の接続部の形状による分類	
I 回転ヘラ切り		A 体部下端が底部全面または回線部が回転ヘラケズリされる		a. 壺が不明瞭なもの	
II 静止糸切り		B 手持ちヘラケズリされる		b. 壺が明瞭なもの	
III 回転糸切り		C 無調整		c. 高台の付くもの	

各分類の年代については、ここで行なった分類と同じ基準で分類した岡田茂弘・桑原滋郎両氏の『多賀城周辺における古代壺形土器の変遷』(註12) により考えることにする。本書の 6 つの分類は、上記論文によれば、それぞれ第18表に示したように分類され、年代が与えられている。

(2) 桶文土器、(3) 須恵器



第50図 須恵器環集成図

第18表 須恵器環分類表

本名・分類	第四Na	登録Na	出土地點	多質域分類	年年代観
I A a	1	E 34	II区S XI - 1層	I - a	7世紀末~8世紀前葉
	2	E 5	II区		
I A b	3	E 30	II区S I 1 - 3層	I - b	8世紀前葉
	4	E 29	II区S I 1 - 3層		
	5	E 28	II区S I 1 - 3層		
	6	E 31	II区S I 1 - 底		
I C b	7	E 1	I区86号一括	6 - b	8世紀末~9世紀末
	8	E 2	I区8 b号一括		
	9	E 20	II区		
	10	E 25	II区		
	11	E 3	II区		
	12	E 6	V層		
II A b	13	E 19	II区	V~VII層	3 8世紀中葉
II A b c	14	E 8	II区	V層	(3) (8世紀中葉)
II B b	15	E 7	II区	V層	4 8世紀中葉

る。

須恵器環の分類とその年代によると、本遺跡出土の須恵器環には、明確な回転糸切り技法によるものではなく、7世紀末から8世紀前葉のもの1種2点・8世紀中葉のもの3種7点、8世紀末から9世紀のもの1種6点が出土した。出土遺構及び基本層位との関係についてみると、II区V層上面で検出された1号住居跡の床面直上及び堆積土下部より出土したI Ab類の4点

Ⅳ まとめ、1. 出土遺物の総括

が基準となる。I Ab類は8世紀中葉の年代を与えられるので、1号住居跡も同年代のものと考えることができる。したがって1号住居跡の検出面であるII区V層の形成年代は8世紀中葉以前となり、V層より7世紀末から8世紀前葉のI Aa類（第50図No.2）が出土していることは矛盾はない。また、II区V層中からは、I Aa類だけではなく、II Ab類（第50図No.13、14）、II Bb類（第50図No.15）も出土していることも考え合わせると、V層の形成年代は、8世紀前葉から中葉にかけての時期と考えられる。その下のII区VI層上面については、VI層上面検出のSX-1よりI Aa類が出土しているので、7世紀末から8世紀前葉には形成されていたと考えることができる。さらにII区VI層はそれ以前の年代が考えられる。ただし、II区のV層、VI層、VII層中からICb類の壺片（第50図No.9・10・12）が出土し、上述の年代観に矛盾を生じている。調査者としては、ICb類の年代が、7世紀末にまでさかのぼると考えるより、II区の基本層出土遺物についても述べたように、調査中に検出できなかった攪乱及びピット等があり、これらへの混入品を基本層のものとして取り上げたとするのが妥当と考えている。

I区とII区の須恵器壺についてみると、I区で実測できたものはICb類2点（第50図No.7・8）があるだけで、II区のように8世紀前葉以前にさかのぼるものはないようである。

[蓋]

蓋には第42図No.2のように口径の割に天井の高いものと第38図No.1のような口径の割に天井が低く偏平なものと2種類が出土している。前者は短頭壺、後者は壺の蓋と考えられる。ともにリング状のつまみがつく。年代については、II区VI層より出土した第42図No.2は類例がないので確かなことは不明であるが、このように天井部が高く、天井の縁辺部に突帯が巡るもののが、III期（7世紀前半～7世紀後半）の末からIV期（7世紀後半～8世紀末）の初頭にかけて存在することから考えると、本品の年代は7世紀の末頃と考えられる。これは壺の年代よりみたII区IV層の年代と相応し、矛盾は生じない。

第38図No.1 2の偏平な蓋については、SX-1での須恵器壺I Aa類との共存関係により7世紀末～8世紀前半の年代が考えられる。

[甕]

甕類は3点（第9図No.3・第22図No.2・第42図No.5）出土しているのが、年代のわかるものはない。ただ第42図No.5は5段の波状沈線文と櫛書き連点文を有し、装飾性の高い点を考えると9世紀を下るものではなく、また、陶邑編年のI期、II期のような細かくシャープな波状沈に比べるとかなり荒い波状文となっていることからすると、7世紀から8世紀頃のものと考えられる。

[甕]

甕は13点実測したが、年代の得られるものはない。共存する壺と同時期またはそれに近い年代と考えられる。

〔瓶〕

須恵器の瓶は、無底式で内面底部近くに突起を有し、体面外部には6段の波状沈線文を施すという特徴を有している。年代としては、1号住居跡の埋没年代である8世紀中葉以前と考えられる。

宮城県内より出土した須恵器瓶の例は少なく、管見する範囲では、鳥屋窯跡三角田南地区2号窯跡出土品（大和町）（註13）亀岡遺跡3号土壙・同第1号住居跡（大衡村）（註14）清水遺跡II区（名取市）（註15）の4点があるだけである。管見外のものがあったとしても、その出土点数は、他の器種と比較しても著しく少なく、特殊な存在であると考えられる。

〔台形土器〕

第38回No.5は器種の名称がわからぬために、異形土器と呼んだものである。実測図では、径の狭い方を上にして実測したが、逆になる可能性もある。これとまったく同形の類例を求めるることはできなかったが、類似したものには、陶邑古窯址群のMT21号窯跡出土の49番に図示されたものがある（註16）。これは、器高約5cm、体部径約29cmのもので、体部に直径2.5cmの円孔の孔を穿っている。実測図は本書のものとは逆に、開いた側を下にしているが、その天井部（本書の底部に当る）には、推定径13.5cmの大きな円形の穴が開かれている。器形については述べられていない。いずれ何かの台として使用されたのではないかと考えられる。

年代については、SX-1の1層で共存している須恵器坏1Aの年代により、7世紀末から8世紀前葉と考えられるが、MT21の年代—IV期初頭（7世紀後半頃）と矛盾しない。

〔4〕 土師器

土師器は、ロクロ使用前のものと、ロクロ使用後のものがあり、前者には坏・壺・甕の器種があり、後者には壺と甕がある。

〔杯〕

実測できたものは18点ある。これを各遺物の器形の特徴によって第19表の分類基準を設け、これに従って分類すると第51回及び第20表のようになる。これを型式編年にてはめると、I AX-Iに分類された第51回No.1は、塩釜式に相当し、IAY口からICYホに分類されたNo.12-16は国分寺下層式に相当し、ICXホ類は表杉ノ入式に相当する。表でわかるようにI区では塩釜式及び表杉ノ入式が出土しているが、II区においては実測しうるような塩釜式及び、表杉ノ入式の遺物は出土していない。反対にI区ではII区で実測できるものだけで15点も出土しているのに対し、国分寺下層式と認定できる遺物は出土していない。

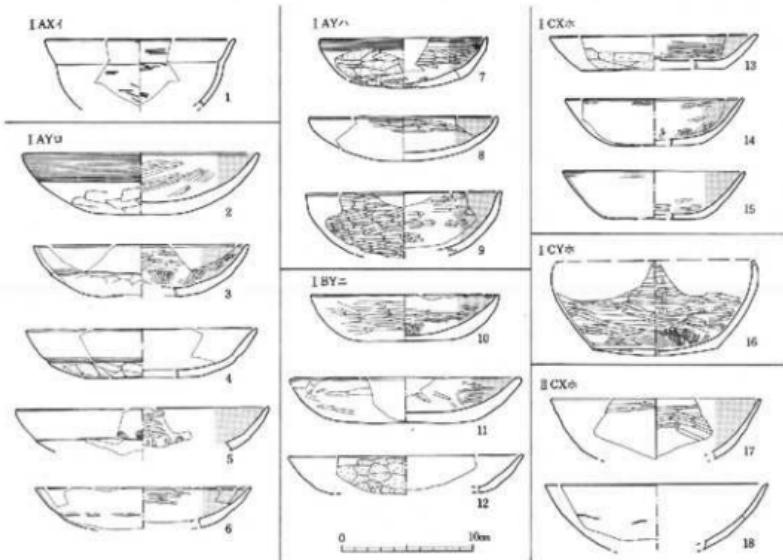
次に国分寺下層式の第51回No.2～16までの土器に限定して考えることにする。

須恵器との共存と基本層位、出土遺構の関係についてみると、共存関係において最も信頼性

Ⅳ. まとめ 1. 出土遺物の総括

第19表 土師器坏の分類基準

1. ロクロ使用の有無	2. 底部の形状による分類	3. 口縁部の形状による分類	4. 体部と底部の体の形状による分類
I ロクロ未使用	A 丸底	X. 外傾する	イ 外面がわずかにくびれ、対応する内面に稜を形成 ロ外間にわずかな段を形成し、内面には変化なし ハ特に変化がなく口縁に至る ニ不明瞭ではあるが、丸味のある角を確認できる ホ角について境がわかる
	B 丸底風平底 C 平底	Y. 内溝する	
II ロクロ使用			



第51図 土師器坏集成図

の高いものは、1号住居跡床面直上及び、カマド内から出土したI BYニ類に分類された3点の土師器坏と、同床面から出土したI Ab類の須恵器坏との関係である。この関係に着目すると、3点の土師器の年代は8世紀中葉頃に位置付けることができる。また1号住居跡の3層中には床面と同類の須恵器坏3点が出土していることから推察すると、住居跡床面の遺物と3層(堆積土下部)との時間差がかなり少ないと考えられる。とすれば、同じ1号住居跡3層出土の第51図No.7(I AYハ)及び第51図No.15(I CXホ)についても、床面遺物と同時期のものと考えられる。これをまとめてみると、1号住居跡の床面直上(カマドを含む)の遺物はI BYニ類に限定されるが、堆積土中より出土しているI AYニ類及び、I CXホとの時期は少なくともしきば同一時期のもので、8世紀中葉頃の年代が考えられる。

第20表 土器器坏分類表

No.	分類	登録No.	出 土 地 点	共存須恵器	須恵器の年代
1	I AYイ	C-1	I区	V層	
2		C-6	II区	V層 (IIAb)	(8世紀中葉)
3		C-7	II区	V層 (IIAb)	(+ +)
4	I AYロ	C-8	II区	V層 IAb	7世紀末~8世紀前葉
5		C-9	II区	V層 IAa	*
6		C-20	II区	S I - 1 - SK 2	
7		C-16	II区	S I - 1 - 3層 IAb	8世紀中葉
8	I AYハ	C-10	II区	V層 IAa	7世紀末~8世紀前葉
9		C-11	II区	V層 (IIAb)	(8世紀中葉)
10		C-18	II区	S I - 1 - 床底 IAb	8世紀中葉
11	I BYニ	C-17	II区	S I - 1 - 床底 IAb	*
12		C-19	II区	S I - 1 - カマド IAb	*
13		C-13	II区	S B - 1	
14	I CXホ	C-14	II区	S B - 1	
15		C-15	I区	S I - 1 - 3層 IAb	8世紀中葉
16	I CYホ	C-16	II区	S X - 1 - 1層 IAa	7世紀末~8世紀前葉
17		D-5	I区	P 4	
18	II CXホ	D-6	I区	SK - 1	

では、I AYハ類、I BYニ類、I CXホ類(第51図No.7~15)と、I AYロ類(第51図No.2~6)との関係についてみると、I AYロ類は、1号住居跡の検出面であるV層及び、その下のVI層よりの出土であるから、当然I AYハ類及び、I BYニ類、I CXホ類の土器よりも古いものと考えることができる。そしてその年代については、須恵器坏で検討した結果から得られたV層、VI層の年代—7世紀末から8世紀前葉—と一緒に考えられる。ただし、II区V層、VI層中からも先にI AYハ類と分類し、8世紀中葉とした土器(第51図No.8、9)も出土しているので、これが、II区VI層から1号住居跡出土土器まで大きな時間差がないことを示しているのか、また同じI AYハ類でも、口縁部直下までヘラケズリだけによって調整されるものと、外側全体がヘラミガキ調整されるものとでは時間差があることを示しているものなのか、あるいは、前々より述べているように、上層よりの混入品があったのかについては、今後別の検討が必要のようである。

なお、SX-1出土の第51図No.16についても、他の同遺構出土品と同様に、7世紀の年代を与えることができるかどうか今後の検討が必要である。

〔壺〕

第9図No.3に示した上器は、体部下半の破片であるが、やや偏平な球形を呈しており、壺と考えられる。外側の体部下端には細いハケメ調整痕が残り、体部内面はヘラナデ調整されている。底部は小さく、やや上げ底風に削られている。器形及び、調整の特徴から塩釜式期のものと考えられる。

〔要〕

要は13点実測できた。このうち9点はロクロ使用前、3点はロクロ使用後のもので、他に1点、ロクロが使われたかどうか不明のものがある。

第11図No.1の要は、頸部から口縁部にかけて幅が広く、大きく外反し、口唇部ヨコナデ、頸部から肩部にかけての外面ハメケ、内面ヘラナデにより調整される。体部と頸部の境統部内面には稜が形成される。このような特徴を有するものは、塩釜式期に属するものと思われる。

第19図No.1～5の1号住居跡出土品で、器形及び調整については、すでに述べたようであるが、ここでもう一つの特徴として、大型のもの（第19図No.13）は口唇部が幅広く、強く外反するのに対し、小型のもの（第19図No.2・5）は口縁部が短かく、軽く外反することが指摘できる。またこの段階では、栗圓式の要の特徴となっていた体部と口縁部の境の段は、消滅してしまう。1号住居跡出土の土師器要の年代は、3層出土品を含め、共存の須恵器と同じく、8世紀中葉頃と考えられる。また、表上より出土している第39図No.3についても1号住居跡出土第19図No.5と類似するので、8世紀中葉頃と考えられる。

第1図No.1の体部下半部片については、土器の特徴からは栗圓式または国分寺下層式から判断できないが、SX-1出土須恵器の年代から7世紀末から8世紀前葉の年代が考えられる。

第43図No.3のⅣ層出土要は、底部の端部が外側に張り出している点は、栗圓式以前の要には見られず、国分寺下層式になって見られる特徴であることから、国分寺下層式期に属するもので、年代としてはⅡ区Ⅳ層の年代と同一に考えられる。

第10図No.3～5の一括出土の要3点は、共存する須恵器环が、8世紀末から9世紀末のものであることから、この年代幅の中で考えることができる。3点の要は、肩部から口縁端部にかけての器形は個性的であるのに対し、器面調整においてはかなり類似性が強く認められる。

(5)赤焼土器

赤焼土器は、出土量が少なく、実測できたのは第11図3の1点だけである。この年代については、白鳥良一氏による「多賀城跡出土土器の変遷」（註17）におけるE群土器の須恵器及び須恵形土器に器形の類似性を認めることができる。E群土器についてはほぼ10世紀の年代が与えられているので、本遺跡出土の赤焼土器についても10世紀頃という年代が考えられる。

(6) 土 錘

土錘はⅠ区から1点、Ⅱ区から5点出土している。Ⅱ区から出土したものはⅣ層中のものからⅥ層中のものまであるが層的に大きさ及び形状に大差は認められない。年代について明確なものはないが、Ⅱ区の須恵器、土師器の年代が、7世紀末から9世紀に限定されていることか

1. 出土遺物の総括、2. 発見遺構の年代と総括

ら、これらの土器もこの年代のものと考えられる。

(7) 刀子

刀子は、形状のわかる唯一鉄製品である。VI層から出土しているので、7世紀末から8世紀前葉のものと考えられる。他にも鉄製品と考えられるものの断片が少數出土しているが、銹化が著しく形状のわかるものはない。また、V層及びVI層中からは、鉄滓が少量出土している。
(写真38-7)

(8) 陶 球

陶球は、どちらも小破片であるので、他の跡ものと比較することはできないが、V層より出土しており、これがV層への混入品でないとすれば、すでに8世紀前半に、当遺跡で球を使用するに至っていたことになる。陶球は、近接する下ノ内遺跡からも出土しており、下ノ内遺跡及び、当遺構の掘立柱建物跡群との関係において、古代におけるこの地域の歴史的性格について再考する必要があると考えられる。

(9) 陶磁器

陶磁器については、V-1-(4)で述べたようにI区より3点出土している。平安時代末から鎌倉時代にかけてと考えられる常滑産の鉢(第12図No.2)が最も古い。中国産の青磁は、13~14世紀頃と考えられる。(註18) 第12図No.1の裏片は、中世の陶器と考えられるが、年代及び生産地については明らかでない。

2. 発見遺構の年代と総括

(1) I区の土壤・ピット

土壤が7基、ピットが15個、それぞれV層、VI層、VII層上面で検出された。このV、VI、VII層について時期を決定すべき資料を得られず、土壤、ピット内の出土遺物より考えてみると、3号、5号、6号については、堆積土中よりロクロ土師器が出土していることから9世紀以降と考えられる。7号、9号、13号ピットについても、堆積土中よりロクロ土師器が出土していることより9世紀以降と考えられる。

(2) I区1号河川

1号河川は、X層中で検出された。覆層は、灰白色火山灰層である。この火山灰が、多賀城

Ⅳ. まとめ

跡及び陸奥国分寺跡で検出されているものと同一のものとすると、10世紀中頃と考えられ、この旧河川は、10世紀中頃以前に埋まってしまったと考えられる。(註19)

(3) Ⅱ区の土壤・ピット

Ⅱ区の工場及びピットは、全てV層上面で検出されたものである。V層年代が8世紀中葉頃と考えられるので、これらの土壤ピットの年代は8世紀中葉をさかのぼるものではない。1・2号土壤については、堆積土中よりロクロ土師器が出土していることから9世紀以降と考えられる。また、1号土壤の2層中より検出されている灰白色火山灰が、多賀城跡及び、陸奥国分寺跡で検出されているものと同起源のものであるとすれば、白鳥良一氏の年代的考察に従って(註20)、10世紀中頃と考えられ、1号土壤もこの年代を与えることができる。

1・2号土壤の性格については、形態及び出土遺物からみても、それを明らかにすることはできない。3号土壤については、形が整い、堆積土下部に多量の炭火物が層をなしていることからすれば、何かの貯蔵穴とも考えられる。

(4) 溝 跡

溝跡は、Ⅱ区において8条検出された。各層の検出層は、V層上面3条、VI層上面が2条、VII層上面が2条、Ⅷ層上面が1条である。ただし3号溝についてはロクロ土師器が出土しているので、V層またはそれより上層よりの掘り込みと考えられる。溝跡の方向には統一性は認められないが、V層、VI層上面検出の溝跡(2、3、5、6、8、9号溝)は、3号を除くとほぼ南北または東西方向にのびるのに対し、下のⅦ層、Ⅷ層上面検出の溝跡(4、7号溝)は、真北に對して斜方向に延びるという傾向が認められる。また4号や7号溝のように検出面が深く、さらに掘り込みの深い溝跡の底面には砂の錐痕が認められ、かなりの水量があったと考えることができる。

溝の底面は、調査範囲が狭いために大きな傾きを示すのはもなかったが、4、5、7、8号溝においてわずかに認めることができた。Ⅶ層検出の4号、及びⅧ層検出の7号は、遺跡の北側の後背湿地の方向が下がっている。5号、8号は、それぞれ西方と東方の反対方向の傾きを呈している。

溝の年代としては、ロクロ土師器の出土している3、8、9号については9世紀以降のものと考えられる。V層上面検出の2号については8世紀中葉以降、VI層上面検出の5、6号については7世紀末から8世紀前葉頃、VII・Ⅷ層上面検出の7号については7世紀末以前の年代が考えられる。

(5) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟分検出されているが、調査区が狭いためにその全容のわかるものはない。建物跡の規模及び柱穴掘り方の規模も個別的である。1号掘立が最も大きく梁行が3間(5.25m)あり、桁行も3間を超えるものと思われる。柱穴の掘り方も方形または隅丸方形と比較的整っている。これに対し、2号掘立柱建物跡は梁行2間(3.85m-検出例を梁と考えた場合)と小規模で、柱穴掘り方も小さな円形のものである。1号、2号掘立柱建物跡には、構造上の差は建物の機能的差異を示しているものと考えられる。

3号掘立柱建物跡は、南列が1間で4.4mを計る建物である。このように1間の間尺が4mを越えるような掘立柱建物は一般的に見られるものではない。また、柱穴掘り方も不統一である。このことから考えると、3号掘立柱建物跡とした遺構は、掘立柱建物跡ではなく、床面を含む上部を削平された南北2間東西1間からなる6本柱上穴の竪穴住居跡の柱穴で、検出柱穴はその南側2/3と考えられる。

1、2号掘立柱建物跡の年代は、柱穴掘り中よりロクロ土師器片を出土していることから、9世紀以降と考えられる。3号掘立柱建物跡とした遺構については埴輪上面が検出面であることから7世紀末以前のものと考えられる。

(6) 竪穴住居跡

竪穴住居跡としてプランが検出できたのは、Ⅱ区の1号住居跡1軒だけである。大きさは一辺4.2m以上で、煙道を有するカマドが付設されている。カマドは二期型あり、東壁中央付近から北壁に造り換えている。出土遺物は少ないが、床面出土土器及び堆積土下部出土土器から8世紀中葉の廃棄年代が考えられる。

3. 調査成果のまとめ

① 本調査では、Ⅰ区において土壌1基、ピット多数、旧河川跡1条、Ⅱ区において遺物包含層3枚、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡3軒(竪穴住居跡の柱穴の可能性のある遺構1基を含む)、土壌3基、溝8条、性格不明竪穴遺構1基、ピット多数と、多くの遺構が検出され、これに関係する遺物も多數出土した。これにより、これまで遺跡として周知されていなかった下ノ内浦地区も、周辺地区と同様に多數の遺構の存在する遺跡であることが判明した。

② Ⅰ区とⅡ区では基本層及び出土遺物が多少異なり、Ⅰ区では4世紀代の塩釜式土師器の後は9.10世紀代の土師器、須恵器、赤焼土器の時期に至るまで、その中間時期の遺物は出土して

Ⅳ. まとめ

いない。これに対し、Ⅱ区においては7世紀末から9世紀代の遺物は出土しているが、その前後の遺物として明確なものは縄文土器があるだけである。

③ 今回発見された遺構のうち時期のわかるものは、7世紀末頃と考えられる溝、性格不明の竪穴造構から、10世紀中頃と考えられるⅡ区1号土壙まであるが、これ以外の時期の縄文式土器や、塩釜式土器、中世の陶磁器類も少量ながら出土しているので、これらの時期に關係する遺構も、今後の調査によっては発見されることが予想される。

④ Ⅱ区は遺跡の中央部よりやや南の位置に、Ⅰ区は旧荒川にほぼ接する南端部に位置するが、基本層は暗褐色、灰黃褐色を基調とする粘土質シルト、Ⅰ区は褐色、黃褐色を基調とするシルト、砂質シルトと、層の変化が著しい。

両区のV層前後の標高10.4～11.2mの範囲で、7世紀後半から10世紀代に限定される生活面が確認された。又、灰白火山灰降下時期に近接した時期に、両区とも一部荒川の影響を受けていることが確認された。Ⅱ区で一部深掘区を設定し調査したが、前記以前の遺物包含層は確認できなかった。

註 記

- 註1 田中他：「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第34集
(1981. 12)
- 註2 篠原信彦他：「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報」Ⅱ『仙台市文化財調査報告書』
第1集(1983. 3)
- 註3 仙台市教委：「山口遺跡」現地説明会資料(1982.)
- 註4 註2に同様：
- 註5 渡部・主浜他：「山田上・台遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第30集
(1981. 3)
- 註6 佐藤・斎藤他：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第36集(1982. 3)
- 註7 岩渕・佐藤他：「三神峯遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第25集
(1980. 12)
- 註8 佐藤・吉岡：「山口遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第33集
(1981. 3)

- 註9 伊東・伊藤・岩淵「裏町古墳発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第7集
(1974. 3)
- 註10 長島栄一：「大野田古墳群」年報Ⅲ『仙台市文化財調査報告書』第41集(1982. 3)
- 註11 渡辺・結城：「宮沢窯跡」「古窯跡研究会研究報告」第3冊(1975. 9)
- 註12 岡田・桑原：「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『研究紀要』I(1974. 3)
宮城県多賀城跡調査研究所
- 註13 東北学院大学：「鳥屋窯跡三角川南地区発掘調査報告」「温故」第9号(1975. 3)
考古学研究部
- 註14 東北学院大学：「龜岡遺跡発掘調査報告」「温故」第12号(1979. 10)
考古学研究部
- 註15 丹羽 茂他：「清水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告V」(1981. 3)
- 註16 田辺昭二：「陶邑古窯跡群」I 平安学園考古学クラブ
- 註17 白鳥良一：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅷ(1980. 3)宮城県多賀城跡
調査研究所
- 註18 東京国立博物館：「日本出土の中国陶磁」東京美術(1978)
- 註19 註17と同様
- 註20 註17と同様

参考文献

- 大阪府教育委員会：「陶邑」Ⅱ、Ⅲ『大阪府文化財調査報告書』第29・30輯
- 氏家和典：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』十輯(1957)
- 氏家和典：「陸奥国分寺跡出土の丸底环をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
(1967)

写 真 図 版

写真1 I区全景
(東より)

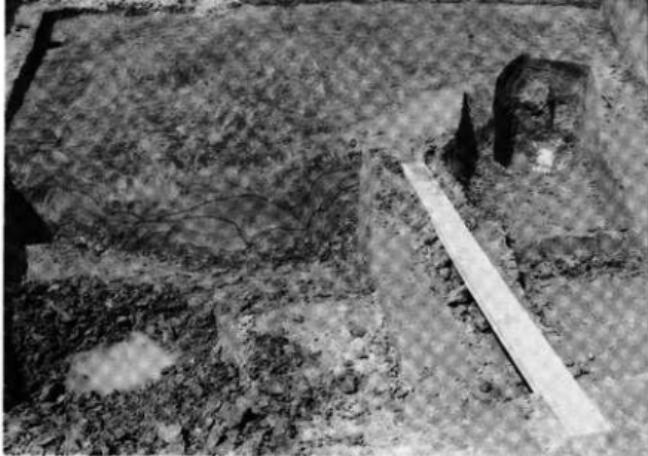
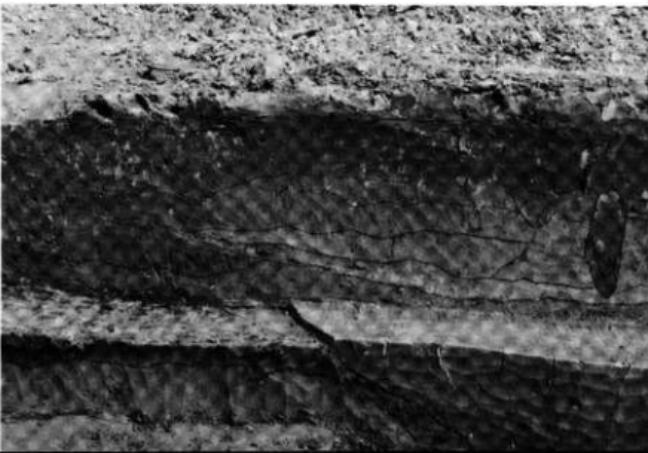


写真2 I区西壁断面
(東より)



写真3 I区北壁断面
(南より)



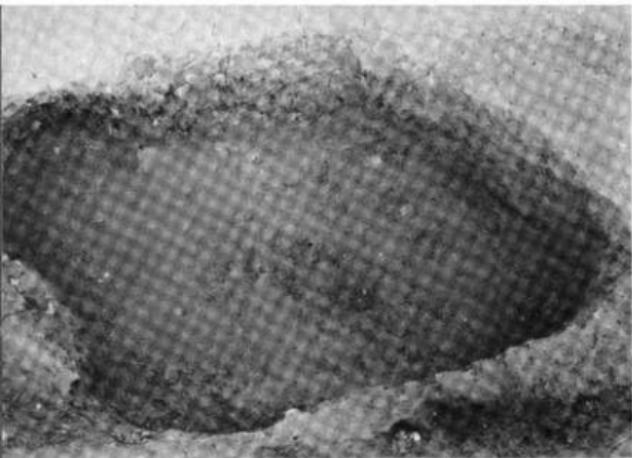


写真4 I区1号土壤
(西より)

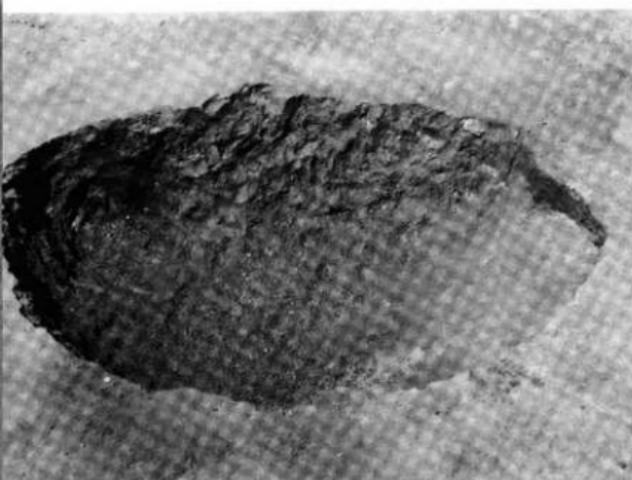


写真5 I区2号土壤
(南より)

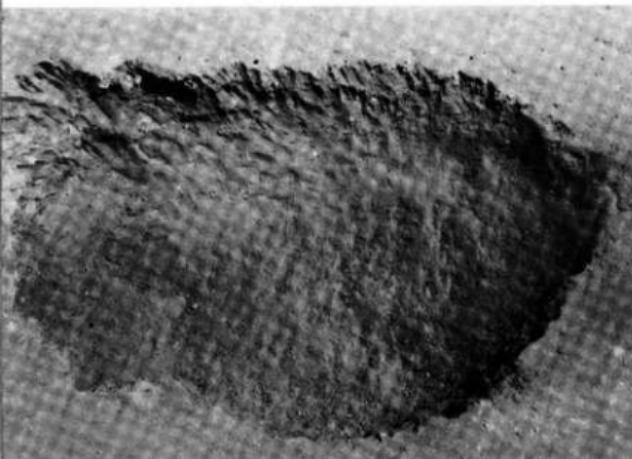


写真6 I区3号土壤
(北より)

写真7 I区5号土壙
(北より)



写真8 I区Ⅲ層上面
—括土器
(東より)



写真9 II区北壁断面
E25付近
(南東より)



写真10 II区北壁断面
—E24～E30—
(南東より)

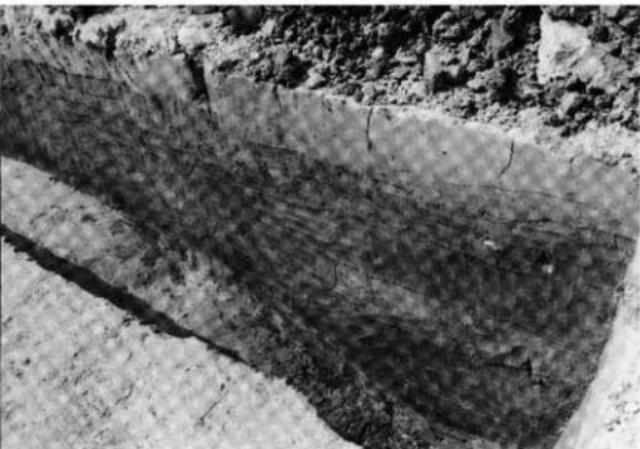


写真11 II区北壁深掘り断面
—E12～E18—
(南より)

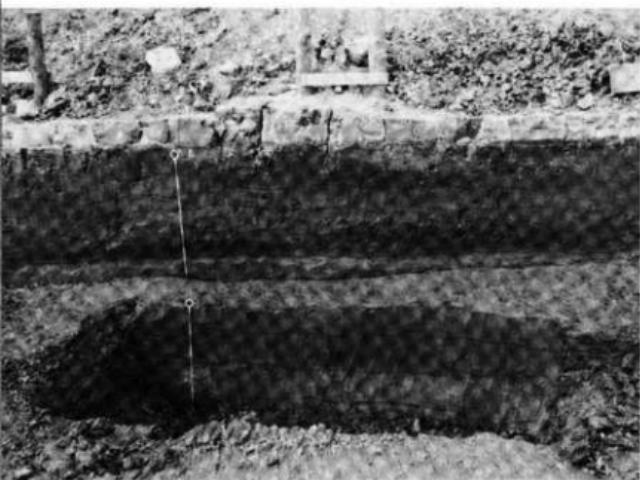


写真12 1号住居跡全景
(南より)



写真13 1号住居跡
カマド(新)
(南より)



写真14 1号住居跡
カマド(旧)
(西より)

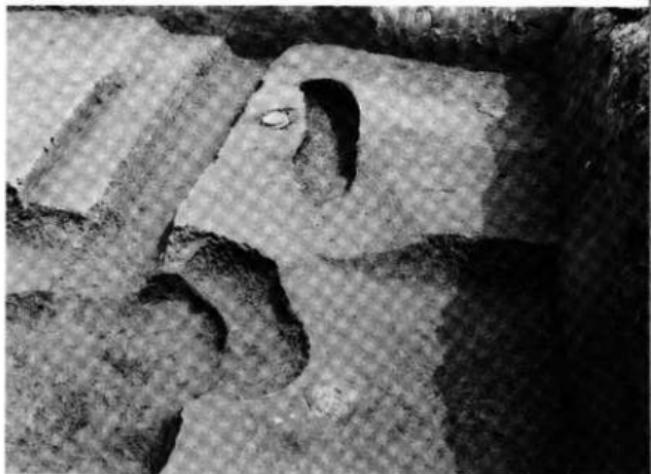


写真15 1号住居跡カマド(旧)
縦断面 (南西より)

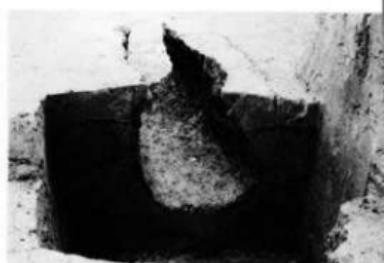


写真16 1号住居跡カマド(新)
横断図 (北より)

写真17 1号掘立柱建物跡
P1-2
(南より)

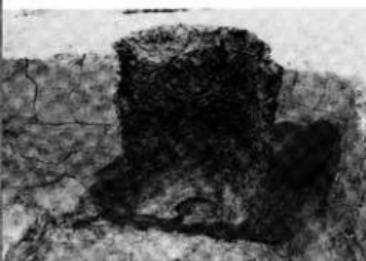


写真18 1号掘立柱建物跡P3完掘
(北より)

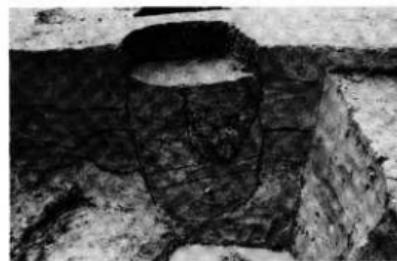


写真19 1号掘立柱建物跡P4断面
(北より)

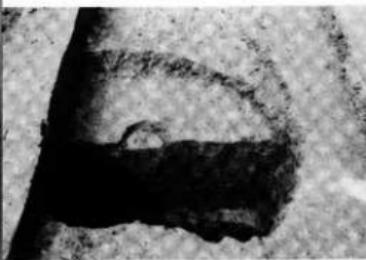


写真20 1号掘立柱建物跡P4断面
(東より)

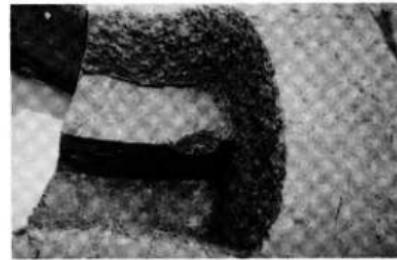


写真21 1号掘立柱建物跡P2断面
(東より)

写真22 2号掘立柱建物跡
(東より)



写真23 3号掘立柱建物跡
(西より)



写真24 3号掘立柱建物跡P 断面
(西より)

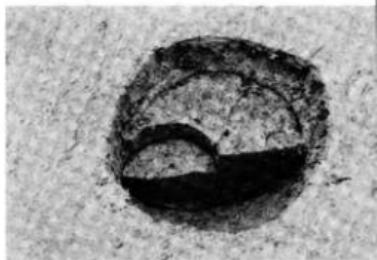


写真25 2号掘立柱建物跡P 2断面
(南東より)



写真26 1号性格不明遺構
(北西より)

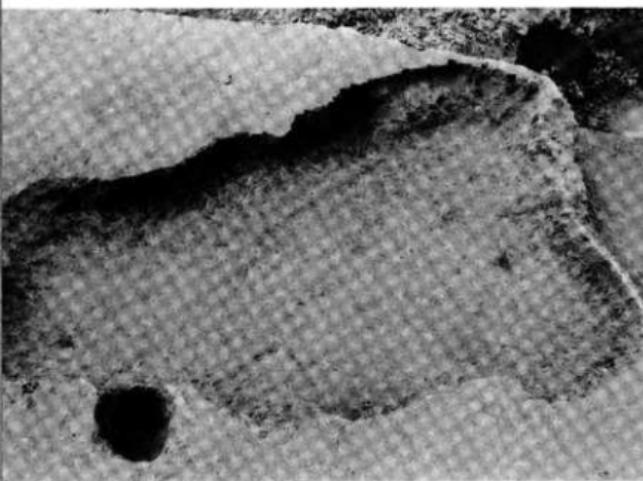


写真27 II区1号土壤
(北より)

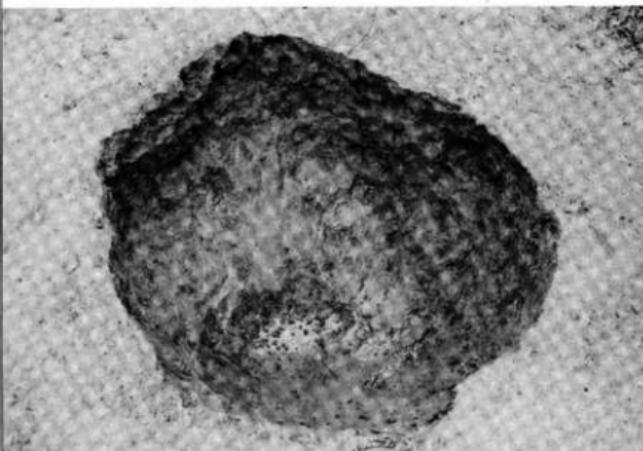


写真28 II区2号土壤
(東より)

写真29 II区 3号土壤
(西より)

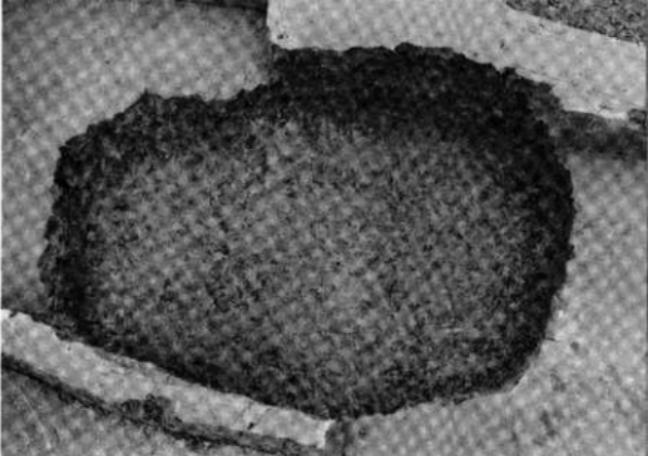


写真30 2号溝
(南より)

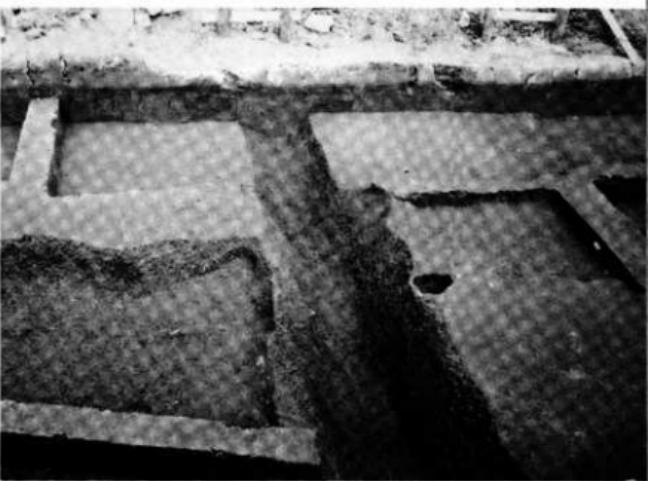
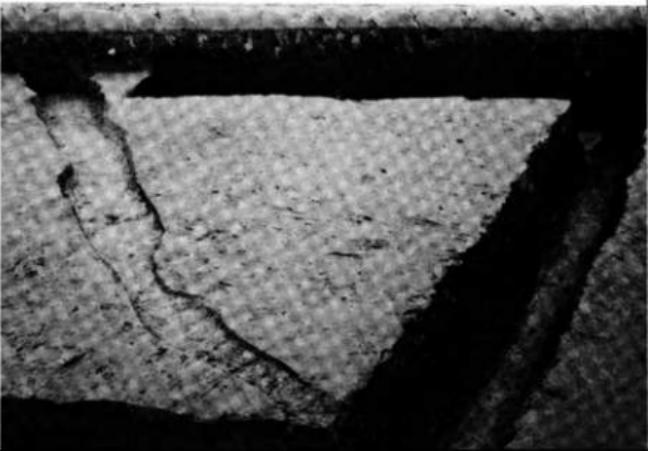


写真31 3・4号溝
(南より)
右4号・左3号



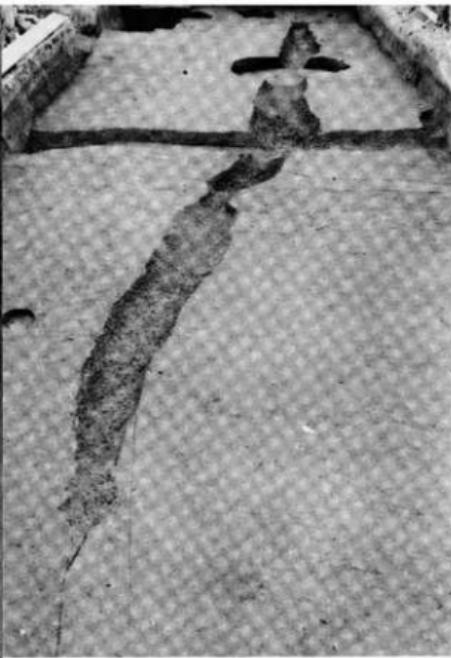


写真32 5・6号溝
一縦5号一
(東より)

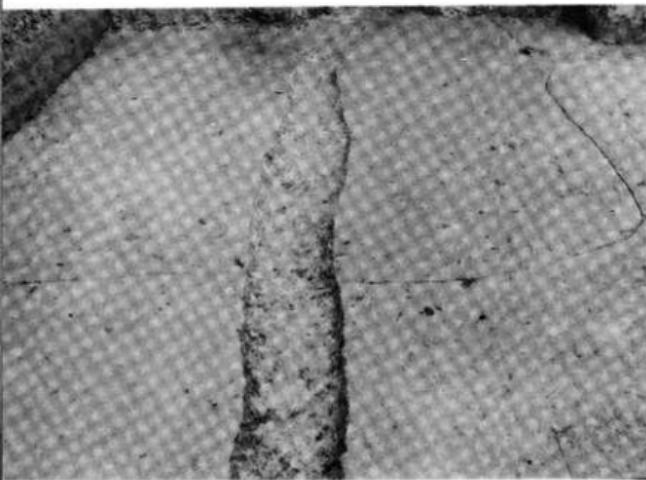
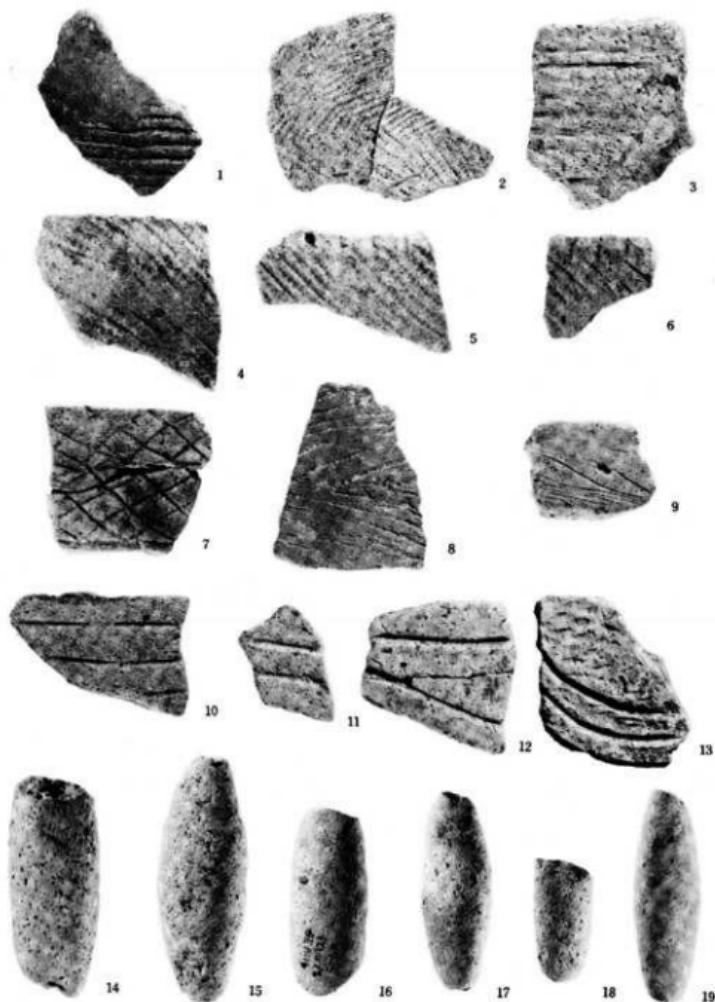


写真33 8号溝
(東より)



No.	登録種別	地区名	遺構	層位	No.	登録種別	地区名	遺構	層位
1 A - 1	縄文土器	II		V層	11 A - 11	縄文土器	II		V層
2 A - 2	縄文土器	II		Ⅳ層	12 A - 12	縄文土器	II		V層
3 A - 3	縄文土器	II	SP - 4		13 A - 13	縄文土器	II		V層
4 A - 4	縄文土器	II			14 P - 1	土錐	II		IV層
5 A - 5	縄文土器	II		Ⅳ層	15 P - 2	土錐	II		IV - VI層
6 A - 6	縄文土器	II		V層	16 P - 4	土錐	II		IV - VI層
7 A - 7	縄文土器	II		Ⅴ層	17 P - 5	土錐	II		I VI層
8 A - 8	縄文土器	II		V - Ⅳ層	18 P - 6	土錐	II		VI層
9 A - 9	縄文土器	II		Ⅳ層	19 P - 7	土錐	II	SK - 1	V層
10 A - 10	縄文土器	II		V層					

写真34 縄文土器、土製品

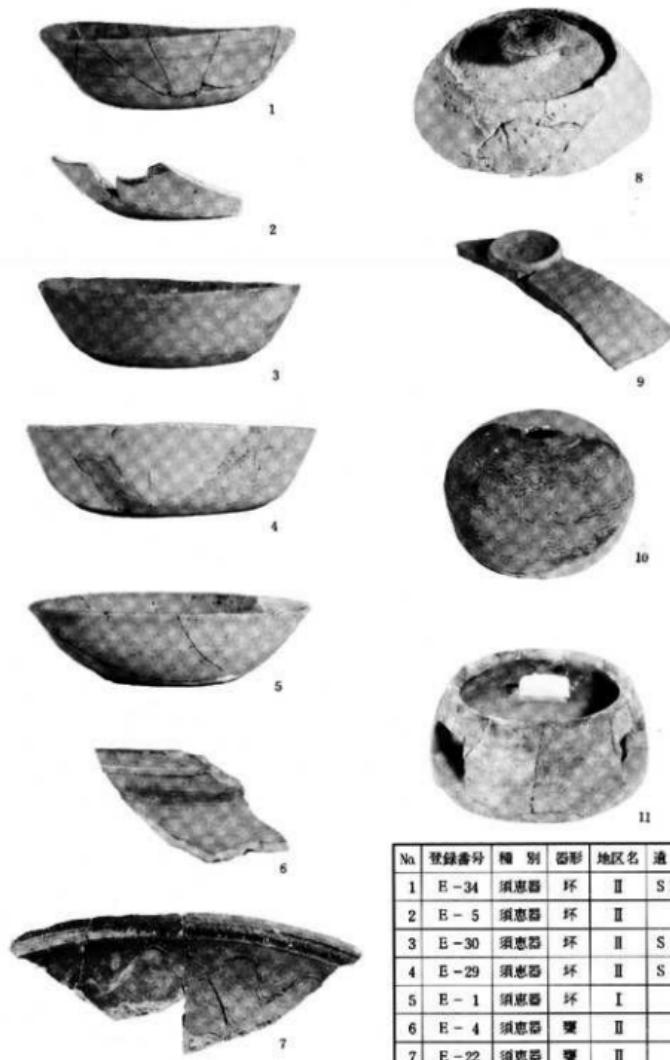
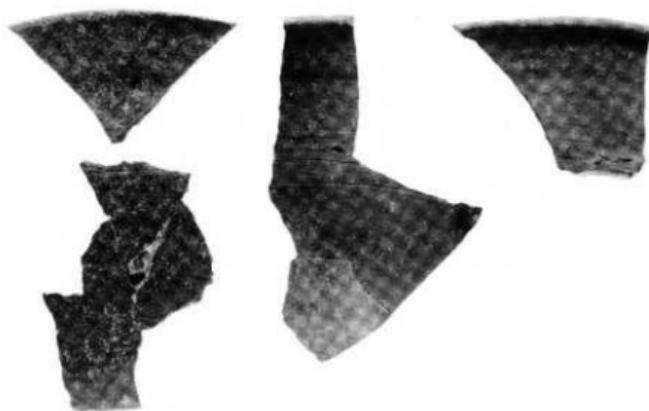


写真35 須恵器

No.	登録番号	種別	器形	地区名	遺構	層位
1	E-34	須恵器	壺	II	S X - 1	1層
2	E-5	須恵器	壺	II		V層
3	E-30	須恵器	壺	II	S I - 1	3層
4	E-29	須恵器	壺	II	S I - 1	3層
5	E-1	須恵器	壺	I		Vb層
6	E-4	須恵器	壺	II		II層
7	E-22	須恵器	壺	II		VI層
8	E-21	須恵器	壺	II		VI層
9	E-35	須恵器	壺	II	S X - 1	1層
10	E-26	須恵器	壺	II		V層
11	E-38	須恵器	壺 土器	II	S X - 1	1層



1



2



3

No.	登録番号	種別	器形	地区名	通構	層位
1	E-32	須恵器	瓶	II	S I - 1	かまど内
2	E-29	須恵器	环	II	S I - 1	3層
3	E-3	須恵器	环	II		表採

写真36 須恵器



1



6



2



7



3



8



4



5

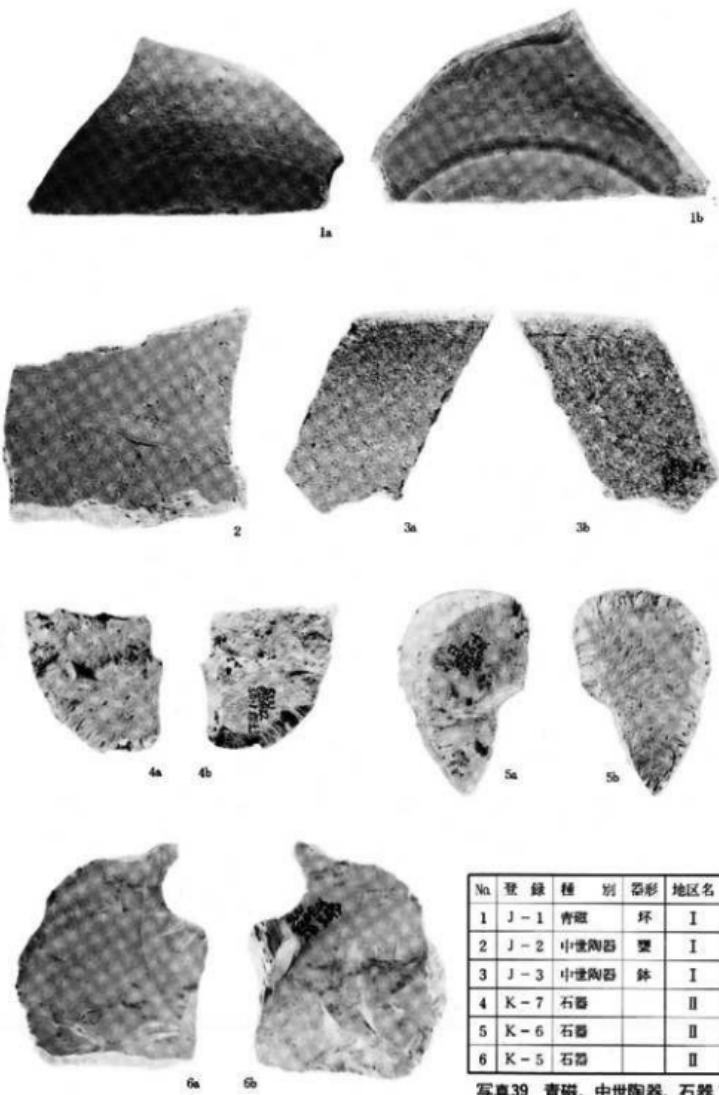
No	登録番号	種別	器形	地区名	遺跡	層位
1	C - 6	土師器	壺	II		V層
2	C - 16	土師器	壺	II	S I - 1	3層
3	C - 10	土師器	壺	II		V層
4	C - 18	土師器	壺	II	S I - 1	床直
5	C - 17	土師器	壺	II	S I - 1	床直
6	C - 2	土師器	甕	I		V層
7	C - 21	土師器	甕	II	S I - 1	3層
8	C - 12	土師器	甕	II		Ⅳ層

写真37 土師器



No.	登録番号	種別	器形	地区名	遺構	層位	No.	登録番号	種別	器形	地区名	遺構	層位
1	D-1	土師器	环	I		V層	5	P-3	手捏ね土器		II		V層
2	D-4	土師器	甕	I		V層b層	6	N-1	鉄製品	刀子	II		V層
3	D-3	土師器	甕	I		V層b層	7		鉄製品	鉄滓			
4	D-2	土師器	甕	I		V層b層							

写真38 土師器、手捏ね土器鉄製品



No.	登録	種別	器形	地区名	遺構	層位
1	J-1	青磁	壺	I		V層
2	J-2	中腹陶器	壺	I		V層
3	J-3	中腹陶器	鉢	I	SK-5	1~2層
4	K-7	石器		II	SD-1	埋土
5	K-6	石器		II	SD-1	埋土
6	K-5	石器		II		5~6層

写真39 青磁、中世陶器、石器 1/2

職員録

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 社会教育課
- 課長 永野昌一
主幹 幸早坂春一
- 文化財管理係
- 係長 大沢隆夫
主任 事山口玄一
渡辺洋一
- 文化財調査係
- 係長(兼) 早坂春一
教諭 佐藤彦一
渡辺忠彦
佐藤正範
加藤正範
主事 中田則和一
結城慎一
成瀬茂
青澤一
青澤みどり
木村浩二
篠原信洋
佐藤安孝
森安孝
佐藤甲二
吉岡恭平
工藤哲
渡部弘美
主浜光湖
斎藤彦彦
長島栄一
荒井裕也
- 調査員 高橋勝也
嘱託 鈴木実
- 第1集 天然記念物靈屋下セコイア化石林調査報告書(昭和39年4月)
 第2集 仙台城(昭和42年3月)
 第3集 仙台市燕沢寺跡横沢古墳群調査報告書(昭和43年3月)
 第4集 史跡塙ヶ原分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
 第5集 仙台市前小泉法源塙古墳調査報告書(昭和47年8月)
 第6集 仙台市荒巻五本松窓跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
 第7集 仙台市富沢町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
 第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
 第10集 仙台市中田町安東久遠跡発掘調査概報(昭和51年3月)
 第11集 史跡遠見塙古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
 第12集 史跡遠見塙古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
 第13集 南小泉遺跡一範圍確認調査報告書一(昭和53年3月)
 第14集 采掘跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
 第15集 史跡遠見塙古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
 第16集 六反田遺跡発掘調査(第2・3次)のあらまし(昭和54年3月)
 第17集 北屋敷遺跡(昭和54年3月)
 第18集 江川跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書(昭和55年3月)
 第20集 史跡遠見塙古墳昭和55年度環境整備調査概報(昭和55年3月)
 第21集 仙台市開発関係道路調査報告I(昭和53年3月)
 第22集 経ヶ峯(昭和55年3月)
 年報1(昭和55年3月)
 第23集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
 第24集 三神事跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
 第25集 史跡遠見塙古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
 第26集 史跡塙ヶ原分寺跡昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
 第27集 年報2(昭和56年3月)
 第28集 郡山遺跡I・昭和55年度発掘調査概報I(昭和56年3月)
 山田上ノ台遺跡発掘調査概報(昭和56年3月)
 第29集 仙台市開発関係道路調査報告II(昭和56年3月)
 第30集 漢ノ菴遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
 第31集 山口遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
 第32集 六反田遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)
 第33集 南小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告(昭和57年3月)
 第34集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報I(昭和57年3月)
 第35集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報II(昭和57年3月)
 第36集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査(昭和57年3月)
 仙台平野の遺跡群I・昭和56年度発掘調査報告書I(昭和57年3月)
 第37集 郡山遺跡II・昭和56年度発掘調査概報(昭和57年3月)
 第38集 燕沢遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
 第39集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報I(昭和57年3月)
 第40集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報II(昭和57年3月)
 第41集 年報3(昭和57年3月)
 第42集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査(昭和57年3月)
 第43集 仙台平野の遺跡群II・昭和57年度発掘調査報告書(昭和57年8月)
 第44集 漢ノ菴遺跡発掘調査報告書(昭和57年12月)
 第45集 茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書I(昭和58年3月)
 第46集 郡山遺跡III・昭和57年度発掘調査概報(昭和58年3月)
 第47集 仙台平野の遺跡群III・昭和57年度発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第48集 史跡遠見塙古墳昭和57年度環境整備予備調査概報(昭和58年3月)
 第49集 仙台市文化財分布調査報告I(昭和58年3月)
 第50集 岩切・畠中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第51集 仙台市文化財分布地図(昭和58年3月)
 第52集 南小泉遺跡I・都市計画街路建設工事関係第2次調査報告(昭和58年3月)
 第53集 中田・畠中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第54集 神明社跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第55集 南小泉遺跡I・青葉女子学園移転新営工事地内調査報告(昭和58年3月)

第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）
第57集 年報4（昭和58年3月）
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）

仙台市文化財調査報告書第59集

下ノ内浦遺跡

昭和58年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 針生印刷株式会社

仙台市伊在白山印刷園地3号

TEL 88-5011
